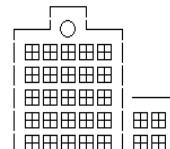


信州大学 物理 同窓会 文理学部 理 学 部 会 報

- 信州大学物理同窓会会報 0076 号 (2021 年春号) SUPAA BULLETIN No. 76 ●
- 2021 年 3 月 27 日発行 ●
- 発行所・信州大学物理同窓会事務局 (<http://www.supaa.com/>)
- 〒390-8621 松本市旭 3-1-1 信州大学理学部物理教室内
- 「旧文理学部物理学専攻」+「理学部物理学科」「理学部物理科学科」「理学部理学科物理学コース」のOB・OG&学生と教職員の会 ■
- Facebook 信大物理 (<https://www.facebook.com/ShinshuPhys>)



はじめに

信州大学の次期学長に農学部教授の中村宗一郎氏が選ばれた。本年 10 月 1 日付で第 15 代学長に就任し、任期は 6 年。難しい時代の舵取りをされる。信大は近年『アジアで最もイノベティブな大学 Top75』の常連となるなど、特に STEM(科学・技術・工学・数学)の分野で成果を挙げて注目される大学となっている。新学長への期待は大。

2 月下旬になり、丹羽公雄さん(文理 17

／名古屋大学名誉教授)のポンテコルボ受賞のニュースが入った。対象は τ ニュートリノ発見をもたらした乾板の自動読み取りの技術という。おめでとうございます。

今号では昨年末に逝去された吉江寛先生の追悼特集続編を企画した。奥様や同僚後輩の先生方に執筆依頼したが、門下生の卒業生からも続々と投稿があり、先生の遺徳の高さを痛感することとなった。(高)

===== 《巻頭のこの 1 枚》 左近の桜 =====



■撮影：倉田富二（理学3S） 水戸借楽園の「左近の桜」である。千波湖を見下ろす高台にあり、多くの人が春の宵を楽しんでいた。桜紀行で私がこの地を訪れた年の九月、関東地方に甚大な災害をもたらした台風15号の強風で、根元からなぎ倒されてしまったという。夕陽に佇むこのヤマザクラの優美な姿は二度と見ることはできない。 ■撮影日：2019.4.6 ■撮影地：茨城県水戸市

【 I · N · D · E · X 】

- ◆ |第|24|回|信|州|大|学|物|理|会|総|会|(2021年6月26日開催)のご案内・(2)
- ◆ |さ|よ|な|ら| |吉|江|寛|先|生| |追|悼|特|集| |続|編|
- # 吉江寛(夫)を見送って。。。 吉江 かなめ (4)
- # 吉江さんの思い出、「軟式野球」「お酒」「フェアレディZ」 可知 偉行 (6)
- # 吉江寛先生の思い出 武田 三男 (8)
- # 吉江寛先生を想う 天児 寧 (10)
- # 吉江先生を偲んで 石田 悟己(12) # 無上の悲しみ 塚田 岳 (14)
- # 純米大吟醸とZ 名取 奏(15) # 硬派な先生 森田 哲治 (15)
- ◆ クラウドファンディング一部始終 竹下 徹 (16)
- ◎ 丹羽公雄氏(文理17)が「ポンテコルボ賞」を受賞しました！ (20)
- ◇ 勝木渥先生の聞き書き記録の拡がり 足助 尚志 (21)
- ◇ <情報通信業界の最前線から> 当たり前となったテレワーク勤務、その実態は？ 匿名同窓生 (26)
- ★ 最近読んだ本／書評② ★
- 石井俊全著『一般相対性理論を一步一步数式で理解する』によって得られたもの 武原 一記 (29)
- ◇ 【リレーコラム(21)】カレーと私 名取 奏 (31)
- ◆ 【おくやみ申し上げます】野坂徹君を偲んで 福井 達之 (35)
- ◇ |T|O|P|i|C|S|
- ▼日本学会会議の梶田会長、「法に従って任命求める」 (36)
- ▼次期第15代信大大学長に中村宗一郎氏が選任される (37)
- ◇ 【卒業にあたり信大生活を振り返る】大学生活を振り返って 鹿取 亮介 (38)
- 成績優秀者の表彰(39) ● 卒業写真(39)
- ◇ |W|E|B|登|録|者|拡|大|運|動|ご協力ください！(再掲載) (39)
- ◇ 《再録》「同窓会費」「会計細則」決まる！ (40) ◇ 編集後記 (40)

第 24 回 信 大 物 理 会 総 会 の ご 案 内

信州大学物理同窓会員の皆様におかれましてはご清祥のこととお慶び申し上げます。

昨年東京での「第23回信州大学物理会総会」はコロナ禍により中止となりましたが、今年の「第24回信州大学物理会総会」につきまして以下のように開催する予定となりましたので、ご案内いたします。総会は、例年5月の最終土曜日に開催してきましたが、今回は1か月遅らせて6月26日(土)に開催することといたしました。また詳細内容につきましては、ことし**5月10日時点で、状況をみながら最終的な決定**を行います。もし変更点があれば、5月の時点で当会のMLやWEBサイトにおいて告知いたします。

今総会では、記念講演会と年次総会、懇親会を予定しています。記念講演会は、昨年度で定年退職された元高エネルギー物理学研究室教授、現理学部附属国際宇宙科学研究センター長で特任教授の竹下 徹 先生に、「自然の理解（素粒子物理学）の進展と私の関わり」と題してお話しいたします。

今回も多数の同窓会員の皆様にぜひともご参集いただきまして、旧交を温め、またさまざまな情報の交換をし、歓談していただきたくご案内申し上げます。（やむなく欠席される同窓会員の皆様には、総会開催費ほか当会活動資金として一口千円のご支援金(カンパ) について、何卒ご協力をお願い申し上げます。）

記

- **開催日**：2021年6月26日（土）午後2：00～5：30
 - 受付＝午後1：30～ ○記念講演会＝午後2：00～3：00
 - 年次総会＝ 午後3：10～3：45 ○記念撮影＝午後3：50～
 - 懇親会：午後4：00～5：30 終了の予定＞
- **会場**：信州大学理学部講義棟 第1講義室
懇親会会場：旭会館2階ライジングサン
- **会費**：7,000円（当日、会場でお支払いください。なお懇親会を割愛する場合は低額となります。5月に最終案を告知します。） ※ 教職員・学生・院生は無料
- **お申込み方法**：次のいずれかの方法で。締め切りは6月20日
 - ① ホームページ (<http://www.supaa.com/meet24.html>) のオーダーフォームから（ただし、5月10日から稼働します）
 - ② 理学部同窓会報に同封のチラシ裏面「第24回 信州大学物理会総会 出欠連絡」に記入してファックスしていただく

-----ご支援金(カンパ)のお振り込み先-----

◆郵便局の場合／通常郵便貯金 記号：11150 番号：20343411 口座名義：信大物理同窓会 代表者 武田三男（たけだみつお） ◆銀行の場合／
八十二銀行 信州大学前支店 店番号：421 普通預金 口座番号：650215 口座名義：信大物理同窓会 代表者 武田三男（たけだみつお）

===== 第24回信州大学物理会総会 幹事 =====

■三澤進(文理16) ■高藤 惇 (2S) ■百瀬佳典(理17S) ■白川栄治(理23S)
■志水久(91SA) *協力：信州大学物理同窓会学生世話人会

=====

■ 記念講演講師： 竹下 徹 先生

信州大学理学部理学科物理学コース 特任教授 理学部附属国際宇宙科学研究センター長

《略歴》

・1982年 広島大学大学院理学研究科修了 理学博士 ・1982-1991年 東京大学理学部素粒子物理国際研究施設助手（当時のボスは小柴昌俊氏 2002年ノーベル物理学賞受賞）
・1991年 信州大学教養部助教授：スイス CERN 研究所の陽子陽子衝突型加速器実験 ATLAS に参加。 ・2002年 信州大学理学部教授 ・2020年 信州大学退職



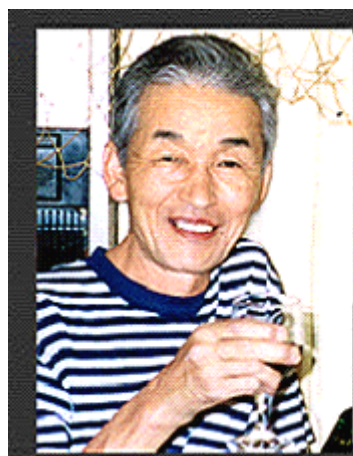
■ 記念講演演題：自然の理解（素粒子物理学）の進展と私の関わり

【講演趣旨】 自然を人の頭で理解しようとする自然科学は、自然に存在する全ての物に興味を抱き、説明しようとしています。私の研究分野である、素粒子物理学は、自然界の「根本物質」のその間に働く「力」を理解すべく挑戦してきました。その方法は、私たちの理解の根源である理論と自然界との整合性を調べる実験の両輪で動いて行きます。今や実験装置は、人類の極限に近い大きさにまで進展しました。巨大加速器による実験がその象徴的存在で、私はどっぷりこの中で研究をしてきました。巨大加速器の作る高いエネルギー状態は、今では宇宙初期の再現とも理解されるようになってきました。この辺りの最近の流れを私の存在と関連づけてお話しします。

《 信州大学理学部物理科の開設2年目から35年間、研究と学生育成に尽くされました 》

さよなら 吉江寛 先生 追悼特集 続編

昨年12月6日に旅立たれた先生の追悼特集として前号では縁(ゆかり)の卒業生からの追悼文を掲載しました。今号の続編には、奥様や同僚の先生方からもご寄稿いただきました。



吉江 寛 先生

1937年 長野県辰野町に生まれる。
松本工業高等学校電気科を卒業。
1961年 金沢大学理学部物理学科を卒業。
その後、同大学院修士課程を修了。
1965年 長野県池田工業高校で2年間教職。
1967年 4月から、信州大学理学部助手。
1986年 信州大学理学部助教授理学博士。
1996年 信州大学理学部教授理学博士。
専門は磁性物理学。
2000年 青少年のための科学の祭典事務局長。
2002年 信州大学理学部教授をご退官。
享年84

■ 吉江寛（夫）を見送って。。。 ■

吉江 かなめ（文理12回 化学専攻 吉江先生令夫人 辰野町在住）

週2回病院で30分面会をさせてくれました。夫の亡くなった12月6日は長男と二人で、面会に行ける日でした。コロナ禍でしたが、午前10時ころ病室に入ると、血圧計・心拍計がついた中ですべてのエネルギーをつかいはたした様な顔をして寝ていましたが、声をかけるとわずか手を振って、口を動かしました。

何を言ったのか真実はわかりませんが反応はそれが最後でした。息子が後で「ありがとうって言ったんじゃない」……と言ってくれたのは救いでした。そして、その日の午後14:06に院長先生と看護婦さんと我々二人の見守る中で、息を引き取りま



した。

およそ4年間の闘病生活でしたが、最後まで生きようとの姿勢があり、あきらめませんでした。在宅がよくて、自宅では一番賑やかな居間で過ごし、必要があつて入院しても早く退院したがつて大変でした。ただ最後まであまり痛みのなかったことは幸いでした。

納棺の時、蓋の上に贈る言葉を身内の人たち皆がお別れの言葉を書いてくれました。一番上の孫が「おじいちゃんのように人にたくさん与えられる人になりたい」と書いてありました。そしていくつかの感謝の言葉の中に娘の夫が「これからも楽しい旅を続けてください」とありました。本当に今はどこにいらっしゃるのでしょうか。皆にも楽しい思い出を残したようです。

信州大学での勤務中、いろいろの葛藤もあったでしょうが、基本的に人間大好きでしたから、同僚の先生方、事務の方々、かわいい学生の中で、充分楽しい生活をしてきたらうと思っています。



▲欧州滞在中に描かれた先生の絵画(ご自宅にて)

思い直せば、学生さんたちはよく辰野の自宅に、バーベキューや焼き鳥をしに来てくれました。先生たちも来てくれました。外国人もよく来ました。卒業生も来てくれました。卒業生の結婚式への出席は数え切れません。仲人も何度もさせて頂きました。

信州大学物理の同窓会誌(2019. 3)には上野さん・高藤さんの提案で、夫の自分史を載せて貰いました。夫が喜

んで話すことをまとめたものですが、うれしかったと思います。

今回の同窓会誌 75 号(2020. 12. 28 発行)には上野さんを先頭に多くの卒業生が追悼文を載せてくださり、夫とのつながりの強さに感動しました。夫が学生さんたちに与えたこと以上に多くのものをもらっているはずです。

私は文理学部 12 回生(化学)ですが、思わぬところから物理同窓会誌の仲間入りをさせて頂きました。そして、同窓会(高藤事務局長)のおかげで、夫の葬儀から始まって、追悼文に至るまで思いがけない花を添えて頂きました。身内の者皆が感謝しております。そして目には見えませんが、吉江寛も満足してワインでもちびち

び飲んでいるような気がします。

本当にいろいろありがとうございました。

■ 吉江さんの思い出、「軟式野球」「お酒」「フェアレディZ」 ■

可知 偉行（文理 11 回卒／元信州大学理学部数学科教授 松本市在住）

辰野町が見晴らせる高台から、元気で頑張れといいながら、我々を見下ろしているのではないだろうか。

吉江さんの思い出は、「軟式野球」、「お酒」、「フェアレディZ」の3つかな。私は、吉江さんの着任の一年後に理学部に就職し、6階に研究室がありました。専門が違う物理学科で5階の住人の吉江さんと親しくなったのは、いつからか、何が切掛けなのか記憶にありませんが、多分軟式野球だろう。吉江さんの投球練習にキャチャーをさせられました。昭和60年に金沢大学理学部との親善交流試合で吉江さんは先発投手として登板し、敗戦投手でしたが、次の年には、棒球クラブ監督の吉江さんの監督としての采配が冴え大勝しました。金沢大学との対抗戦は平成15年が最後になりましたが監督としての活躍しか記憶にありません。まさに監督そのものでした。



1984年(昭和59年)5月に「棒球タイムス」1号が発刊されました。1990年(平成2年)までに317号。その後、「月刊 お父さん」43号、「旭 LEAGUE」5号、「お父さんCup」8号を発刊。1998年9月22日最終版。タイムス社の体制は、社長吉江寛が総て取り仕切り、配達人も行っていました。この新聞は他部局の野球部の皆さんとの交流と棒球クラブを愛し、楽しい憩いの場にしていった歴史です。もう一度読み返してみてください。

監督のすばらしさは監督退官記念「ナイター野球」を松本市営野球場で行った時、棒球クラブ員10名、他部局の人18名の参加があり、監督の奥様、お嬢さんもお見えになったことが表しています。

5階の吉江研究室の本棚にはいろんな土地の日本酒が並んでおり、飲み会が行われていました。利き酒会をやろうということになり、自分の好みの日本酒を持ち寄ることになり、私は「女城主」というお酒を持って行きました。吉江さんは「夜明け前」というお酒でした。夜明け前といえば島崎藤村を思い浮かべ、木曾の酒かと聞いたら、辰野の小野の酒とのこと。皆で飲み比べをしたら夜明け前が一番に。諏訪の酒で「夢殿」も教えてもらったが、高級過ぎて年一度正月に飲んでいます。

赤のフェアレディZに乗せてほしかったが、その機会もなく残念でした。定年後の吉江宅に伺った時は青のフェアレディZが廃車間際でした。以下は、1990年発行「棒球タイムス」290号の投稿文です。

大学院の入学式の日のお出来事です。理学部の玄関前にZを停めておいたら、トラックが来るのでZをどかしてほしいと言う。お父さんは医学部グラウンドの横に動かした。入学式で学生委員長であるお父さんが挨拶をした後、偉い教授先生方と軽く一杯飲んだ。ホロ酔い機嫌でZのそばへ行くと、右ドアに穴ボコがある。硬式野球部が練習しているので、硬球が当たったらしい。お父さんはグラウンドに向かってワメいた。「こら～、お前ら、俺のZに穴をあけたな！」すると、代表みたいな学生が飛んできて帽子をとって「すみません」と謝った。「君たちはどこの野球部かね？」と聞くと「オール信大です」と言う。この時、お父さんはマズイと後悔したのである。何故なら、お父さんは彼等の顧問教官であったから。「まあ、仕方ないや」と言って、Zを理学部玄関前まで移動させたのだが、学生が素直に謝ったのと礼儀正しいのに大変気持ち良くなって、例のヘンな癖がでた。



▲(上)平成5年ころ、吉江研究室にて(棚に酒の瓶が並んでいます) (下)昭和62年8月23日金沢大学(金沢城内)で勝って胴上げされる吉江監督

財布を開けると何故かこの日に限って一万円札がある。早速ノシぶくろに「頑張れ、信大野球部」一顧問一と書いて、再びノコノコとグラウンドへ行き、またワメいた。「代表！ちょっとこっちへ来い」と。びっくりした代表は、練習をやめて帽子をとりフットンで来た。マネージャーの女子学生が、どうなるのかと心配そうで真剣な眼差しだ。そこで、お父さんは「お前ら、頑張れよ」といって一万円を渡したのだ。

その瞬間、グラウンドにいた全ての学生が帽子をとり、直立不動で「ありがとうございました」と言ったのだ。「ま

あ、いいから、いいから」なんて格好つけて帰ってきたお父さんだったが……。

実はこの話には余談がある。先日の日曜日に長野から帰ってきた娘が「お父さん、困るヨ……」と抗議する。「なんだ？」と聞くと、この話にやたらと詳しい。娘の言

うには、教育学部の野球部の連中が娘と行き合うと、直立不動で「どうもありがとうございました」とやるらしい。これにはお父さんが驚いた、そして本当に困ってしまったのである。人間、下手なことはできないということか！

この度は「本当に、下手なことをしたよ」

■ 吉江寛先生の思い出 ■

武田 三男（理学 4S/ 素粒子論研究室 信州大学理事・副学長 安曇野市在住）

吉江先生に初めてお会いしたのは、1969 年春の入学した時と思いますが、この時期は学生運動が活発で、信州大学でも全共闘による松本キャンパスの封鎖が続き、前期の授業のほとんどが実施不可能な状況でした。吉江先生のことをはっきりと覚えている最も古い記憶は、1972 年に物理学実験Ⅱ（3 年次生対象）を受講したときです。金属の磁性特性をスピンエコー法で測定するという実験課題であったように記憶しています。手作りの回路のコイルの中に強磁性体試料を差し込んでオシロスコープでシグナルを観測する実験だったと思います。そもそも原理が理解できなかったのですが、シグナルを出すのに悪戦苦闘した記憶だけははっきり覚えています。私は、卒業研究では宮地先生・高尾先生・寺澤先生の素粒子研究室に所属しましたが、吉江先生の統計研究室には時々顔を出していました。辻村先生や永井先生と（へば：失礼）将棋を指しておられたのを覚えています。



卒業してから、10 年以上経った 1985 年に信州大学の教養部に教員として戻ってきました。赴任のご挨拶に、先生の研究室にご挨拶に伺ったとき、棒球クラブに誘われました。棒球クラブとは、当時の理学部に関係する教職員がメンバーの軟式のいわゆる草野球のチームです。吉江先生が監督兼野手（捕手と時々投手）で、昼休みに当時の教養部グラウンドなどを利用して、練習や紅白試合に精を出していました。監督が自ら道具一式（ベース、バット、球など）をバックに入れて担いで教養部グラウンドまで運んでいた姿を覚えています。



▲ 吉江監督に頂いた賞状（旧姓の和田で出ています）

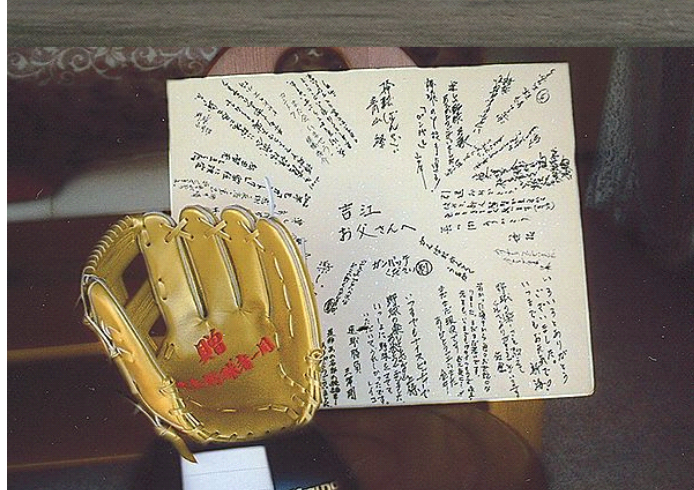
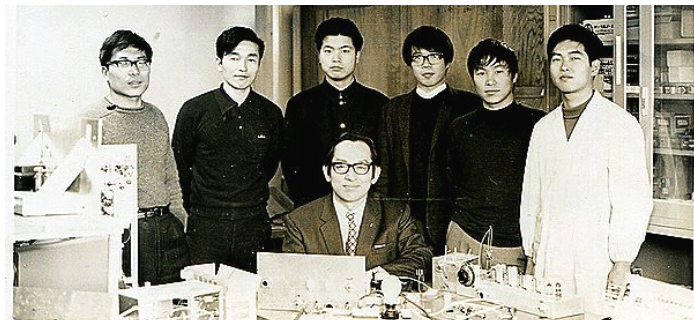
全盛期のクリーンアップは 3 番真次（数学）、4 番笹根（化学）、5 番は小坂（地質）もしくは数学の可知先生だったかと思います（もっとご活躍された方もおられたと思いますが、なにぶん年のせいで記憶が怪しくなりましたので、ご勘弁ください）。後に、天児さん（物理）が捕手として入ってこられたので、吉江先生はほぼ監督に専念されていました。かくい

う私は、もともと運動は苦手でキャッチボールからして様にならず、ましてや、ゴロの捕球と一塁への送球が苦手でした。職員の方の中に、上手い人がいて、特に、手塚さんや西村さんには捕球や送球のときの姿勢や踏み出す足の運びなどを教わりましたが全くものになりませんでした。メンバーが揃わないときに、時々、ラ8（ライトで8番バッター）で使ってもらっていました。

当時は金沢大学との交流が盛んで、野球とテニスの交流戦を金沢市と松本市で交互に開催していました。金沢にはマイクロバスで上高地を横目に見ながら平湯峠を超えて高山へ出て、富山経由で向かいました。帰りの途中で富山の海で泳いだ（？）のが楽しい思い出です。棒球クラブに入会して3年目に「努力賞」をいただきました。私がいただいた、小学校から現在までで唯一の賞状です。吉江先生は、棒球クラブや日常で起こった出来事をテーマに毎週、「棒球だより」なる手作りの新聞（瓦版）を作ってクラブのみなさんに配っていました。また、「お父さんプラハに行く」という、在外研究でチェコに滞在されたときの思い出を綴った本も出版されました。大変愉快的出来事ばかりで、楽しく拝読しました。私自身がのちに在外研究が当たったとき、真っ先に、滞在地にプラハを選んだのもこの吉江先生の本がきっかけでした。

教養部に赴任してから10年後に、教養課程の廃止とともに教養部もなくなりました。教養部に所属していた教員（教官）は、8学部には散りぢりとなりましたが、私は幸いにも、吉江先生のいた理学部物理学科に所属替えとなり、一緒に物理学科の学生の教育を担当することができるようになりました。吉江先生の教育・研究を間近に見られる立場となりました。前述のスピンエコーなど、学生実験の装置や機材を手作りされたり、教科書も工夫されたりと、とにかく教育に熱心に取り組まれた先生でした。物理学実験の教科書を全学の物理学実験の担当者で一緒に執筆させていただいたのも楽しい思い出です（『物理学実験』（学術図書））。この編集に当たられたのが吉江先生でした。（吉江先生は、『みぢかな物理』（学術図書）も執筆されていま

▼(上)1972年3月、統計研究室にて。中央が辻村先生、後列左端が永井先生、ふたり目が吉江先生。皆、若いです
(中)2001年9月19日に吉江監督の引退試合が開かれた。中央赤いシャツが吉江ご夫妻
(下)そのときの寄せ書き



す。この本の中に書かれているテーマで教養科目を担当され、その授業は200人は入る20番教室が満杯になり、立ち見が出るほどの大人気でした。)

研究は同じ固体物性分野で、吉江先生は辻村先生、永井先生、天児さんとともに核磁気共鳴、磁気天秤やメスバウアー装置を使って金属等の磁性相転移の実験研究をされておられました。一方、私は誘電体の構造相転移が専門でしたので、専門分野と使用する測定機器が異なり、ご一緒に共同研究ができなかったのが心残りです。

ご苦労も多かったとは思いますが、よき時代の地方国立大学ののどかな雰囲気の中で、楽しい理想的な教員人生をお送りになられたものと推察いたしております。温かいお人柄を偲び、心からご冥福をお祈りしております。ありがとうございました。

■ 吉江寛先生を想う ■

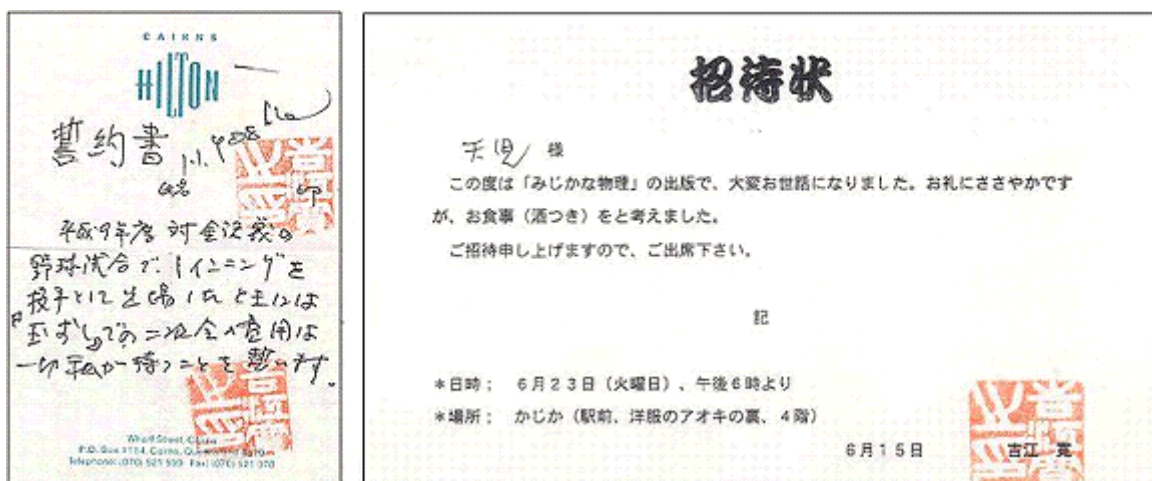
天児 寧 (信州大学理学部理学科物理学コース 磁性物理学 教授 松本市在住)

吉江先生の追悼文を依頼されて、何を書こうかと思いながら研究室の机を整理していたところ、奇跡的に吉江先生(棒球クラブ監督)が書かれた「誓約書」が出てきました。ケアンズのヒルトンのメモ用紙に書かれたそれは、私にとって、まさに吉江先生(監督)を象徴するものに思えます。



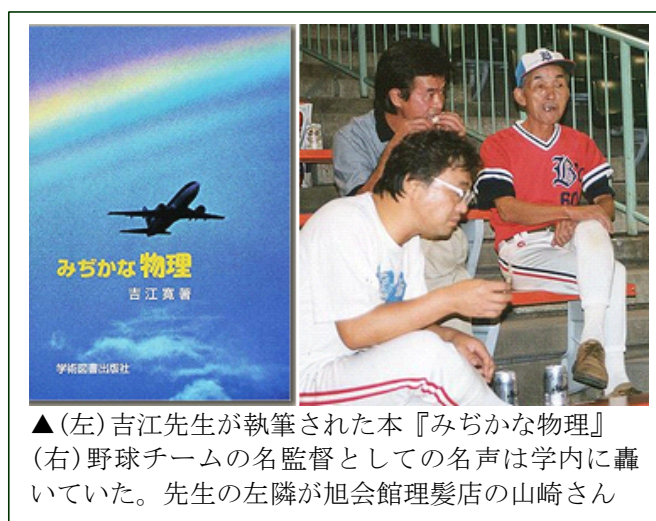
7時半ころに旭会館理髪店の山崎さんと早さを争いながら愛車の(フェアレディ)Zで出勤し、1~2時間に1回コーヒーマルの音を5階に響かせ(あちこちの教員、職員がコーヒを飲みを訪れ)、夕方5時前ころから数学のK先生と地質のK先生などの棒球メンバーを中心とした人たちが監督室に集まり酒盛りが始まる…という1日を過ごされるという印象が頭から離れません。監督室の本棚のガラスには、酒瓶のラベルがぎっしり貼られていました。また、週に2回、昼休みに棒球クラブの紅白戦もしくは各部局対抗の旭町リーグでの野球の試合を行い、その結果や、『お父さん、プラハへ行く』『新お父さん、プラハへ行く』などの文書を「棒球タイムス」や「お父さん」などの新聞にして、半日かけて松本キャンパスの各部局に配達に回っておられました。400-450の発行部数でしたのでキャンパス中の事務の方はみなさん監督のことを知っている状態でした。

この「誓約書」は、当時、年に1回開かれていた金沢大学理学部とのスポーツ(テニス、野球、ソフトボール)交流戦の前のいつもの酒盛り中に、監督が地質のK先生に書かされたもので、「天児、持っている」と預かったものです。残念ながら1997年の金沢戦で吉江投手の姿が見られたかどうかの記憶はありません。



▲(左)筆者が机を整理したら奇跡的に吉江先生(棒球クラブ監督)が書かれた「誓約書」が出てきた (右)『おもしろい物理学』出版印税で食事会を開催。関係者に配られた招待状

吉江先生の追悼文を依頼されて先生の著書『みぢかな物理』を開いたところ、「招待状」がはさまれていました。この本は物理同窓会会報 69 号の「お父さん(寛)のはなく 後編 >(固体物理 34(1999)73-74. からの引用)」でもあるように、共通教育センターの主題別科目「おもしろい物理学」という講義の教科書として書かれたものです。会報にもある通り、前期と後期、併せて信州大学学生定員の 6 割以上にあたる 1200 名を超える 1 年生が受講したマンモス講義です。「学生を二つのグループに分け、隔週の授業とし、講義の不足分は夏休みの集中講義で補った」という離れ業で、学生の教養教育に尽力されました。「成績は講義の中から各自、好きなテーマを選んでレポートを出してもらい、それらを採点することにした」とありますが、毎回、ものすごい束の講義の感想文を整理し、出席をつけておられたことを思い出します。私などは、「本が 1600 円で 1000 冊売れて印税が 10%だから…」と考えてしまっていますが、この「招待状」にあるとおり周りの人間を高級日本料理店に招待し、それをほぼチャラにするという、これもまた離れ業をやったのけるのはさすが先生！！



▲(左)吉江先生が執筆された本『みぢかな物理』 (右)野球チームの名監督としての名声は学内に轟いていた。先生の左隣が旭会館理髪店の山崎さん

学内新聞『お父さん』と講義『おもしろい物理学』で、松本キャンパスで一番顔が知られた教員であったことは間違いありません。

吉江先生の研究について書かないと怒られそうですね。高周波誘導炉などが不調の時には大変お世話になりました。信州大学に低温センター(液体ヘリウム凝縮装)が無かつ

た都合で、会報前号の大西氏や土橋氏の追悼文であった通り、年に1回(〜2回?) 愛用の MATEC(核磁気共鳴の分光器)を Z に乗せ、京都大学の中村陽二先生やその後を引き継がれた志賀正幸先生の研究室に出向き、1週間安宿を借りて実験をさせていただきました。残念ながら私はその様子を見ることはありませんでしたが、物理学会でよくお会いする当時京大の研究室の学生で現在京都大学教授の吉村一良先生が、吉江先生のアグレッシブな実験時の姿勢について印象深く話されておられました。

磁性物理研究者にはおなじみの Handbook of Magnetic Materials (Elsevier) の Vol. 7(1993) 5 章 “Magnetic properties of binary rare-earth 3d-transition-metal intermetallic compounds.” や Vol. 11(1998) 3 章 “Magnetism of permanent magnet materials and related compounds as studied by NMR.” などなどに数多くの H. Yoshie が筆頭著者の論文が引用されていることから分かる通り、希土類元素を含む金属間化合物の研究発展に大きく貢献されております。

■ 吉江先生を偲んで ■

石田 悟己 (19S 統計研 東京大学先端科学技術研究センター極小デバイス理工・生産技術研究所 (助手) 千葉市在住)

3 年のスペクトル系列観測実験で統計研実験室に出入りした時、日常的に野球ユニホーム姿の先生を見かけました。そう、吉江先生です。そして「どこの研究室に？」という時期となり、3 年夏の乗鞍宇宙線観測所アルバイトで大阪市立大学・名古屋大学の先生方と接し、他大学での実験活動にも魅力を感じたことから、「京都大学で実験ができる」という吉江先生のお部屋に伺いました。先生も「京都の宿泊費節約・愛車 Z の代行運転」のお考えがあったようで、ご快諾をいただき以降お世話になりました。



頂いたテーマは、丁度卒業された荻野先輩の研究を引き継ぎ、「 GdCo_3 結晶の Y 置換による核磁気共鳴のサテライトピーク観測」「 LaCo_5 の核磁気共鳴ピークの発見」で、松本で試料作製し有望な試料を京大で NMR 測定することでした。当時 He 回収設備のない信州大で、高価な液体 He を購入大気放出で使用する実験はとても無理で、吉江先生は京大工学部の中村先生を受入教官として液体 He 温度が可能な極低温センターで測定されてました。

早々に荻野先輩の論文を渡され、先生直々に試料作製に必要な装置の取扱指導を受けました。高周波加熱炉は故障時の修理が大変なのでかなり厳しかったです。バーナーで石英パイプからるつぼを手際良く加工され「これを使うように」と渡して下さり、アニール処理用の石英菅室素封入作業も職人の様でした。白色石英管ではアニール後の LaCo_5 結晶性劣化が見られたので、無理を言って高価な透明石英管を

使わせて貰いました。試料封入用の油拡散ポンプを誰かが空焚きをした時、先生と一緒に分解掃除して下さったことや、材料（Gd, La, Y, Co）では特に La が高価だと念押しされて非常にプレッシャーだったことも、懐かしい記憶です。

京大での測定は、装置が長期間借用可能な京大生の夏休み期間と卒業論文執筆時期の2回でした。1回目、理学部棟前で愛車 Z に測定器一式と作製試料を積み込んで、先生のご自宅の辰野に寄って京都へ向かいました。成果目標を GdCo_3 のみに絞ったにも関わらず散々な結果で、悔しさと涙を堪えて Z を運転して松本に戻ってきました。帰りの車中、先生は怒ることも説教もなくずっと寝ておられました。（寝たふりだったかも）

試料作製に再挑戦するのですが、教員免許の教育実習が重なっていました。しかし前回の結果がとても悔しく、教育実習期間中は他の統計研学生が不在で装置が使い放題になるので、先生に何も相談せずに教育実習をキャンセルして試料作製をすることにしました。後から何を言われるかとかなり心配でしたがお咎め無しでした。

2回目、結構寒い時期の運転に雪は大丈夫か？ と心配でしたが、辰野と松本を往復されている先生は全く意に関せずでした。実験は良好で DATA を持ち帰ることができました。 GdCo_3 は測定方法も既知、結果も想定通りだったのか「ウン、ウン…」という感じでしたが、 LaCo_5 の方はどこにピークが有るか判らない手探り状態でした。いろいろ苦慮している時に先生は「駄目元で、低周波の方を試そう！」と、その場で共鳴コイルを造られ測定器の限界に近い条件で測定することにしました。そうしたらピークが見つかり、「出ちゃったよ！」と満遍の笑みでした。液体 He 残量が保つ限りの測定は深夜遅くなってしまい宿泊覚悟でしたが、先生は「家で休め」とタクシー代を渡して下さいました。

翌朝、中村先生の元へ報告に向かわれる吉江先生がまるで学生の様で、とても印象的でした。私はまだ状況を理解できずにいましたが、試料の素性（X 線回折結果）を信じて貰えた事や帰路車中の先生の説明を理解半分ながら聞き、やっと嬉しさを実感しつつ松本に戻ってきました。

この結果で私は卒業、先生は同 1988 年に論文を 2 つまとめられました [1, 2]。この時教わった図面やグラフの書き方や論文投稿の作法は、後に大変役立ちました。

▼(上)1990 年、京都大学工学部の施設での実験の様子
(下)2002 年 4 月 28 日浅間温泉みやま荘で吉江教授の退官記念パーティ。大勢の門下生が集まる。筆者も駆けつけた



卒業後は、就職した企業のリクルートや転職相談などで京都の酒「玉の光」を持参すると、毎回とても嬉しそうに受け取って下さいました。しかしお酒を酌み交わすようなことはなく、当時の大学研究教育・運営の難しさや苦労をいろいろ聞かせていただきました。

今回、信州大時代の資料のある京都の実家へはコロナで帰省できず、記憶のみを辿り文章を綴ってまいりました。先生の事を書くとは半分は自分の事になり恐縮すると共に、今この職に就いているのも先生の影響が非常に大きいことを改めて痛感します。皆様は、吉江先生の野球・飲み会や酒の話などを期待されたかもしれませんが、実際にそのような時間はほぼありませんでした。私には諸先輩方からお聞きするような体験は無く、常に実験等に付き合っていた記憶しかありません。そんな私は先生からすると「つまらない学生」だったかもしれず、その時々先生の心の中には想像の域を出ず、いつか聞こうとの思いは残念ながら叶いませんでした。せめてコロナが落ち着いたら御墓前で直接お礼と感謝を伝えたいと思います。

拙い文ですが、ここに吉江先生のご冥福をお祈りいたします。そして先生を支えてこられたご家族の皆様にご感謝いたします。併せて、このような機会をいただいた物理同窓会の皆様にお礼申し上げます。

- [1] "Nuclear Magnetic Resonance of $GdCo_3$ " H. Yoshie, and Y. Nakamura, J. Phys. Soc. Jpn. **57**, pp. 3157 (1988)
- [2] "Nuclear Magnetic Resonance of $LaCo_5$ " H. Yoshie, and Y. Nakamura, J. Phys. Soc. Jpn. **57**, pp. 3649 (1988)

■ 無上の悲しみ ■

塚田 岳（理学 24S/統計研究室/信濃毎日新聞社/長野市在住）

昨年暮れ、偶然辰野町で仕事があり、夕方、ふと思い立って先生のお宅を訪ねました。

文字通り手ぶらでしたが、突然の訪問にも、奥さまは嫌な顔をせず迎えてくださり、先生の霊前にご焼香することができました。闘病されていたことを奥さまから聞くまで知らなかったため、突然の死が信じられず、遺影のなかの昔と変わらぬにこやかな顔を見ているうちに、涙が止まりませんでした。

学生時代、学業をまったくせず、お情けで卒業させてもらった身としては、少しでも成長した姿を報告できるまでは、先生に合わす顔がないと思ってきました。しかし、その約束はついに果たせず終わってしまいました。



この先、二度と先生にお会いできないのは無上の悲しみです。後はただ、いつか、笑顔の先生に報告できるよう微力を重ねるだけです。

■ 純米大吟醸と Z ■

名取 奏（理学 23S/統計研究室/日産自動車/東京都 町田市在住）

自分にとって吉江先生は、純米大吟醸とフェアレディ Z である。

安酒ばかり飲んでいて学生時代の自分が、初めて呑んだ旨い酒は、吉江先生の研究室で頂いた純米大吟醸だった。コレで酒が呑めるようになったんだ、と楽しそうに話す吉江先生の顔は今でも覚えている。その後社会人になり、そこそこ旨い酒も覚えたが、その原点は吉江研究室で御馳走になった純米大吟醸である。



フェアレディ Z は、若造ではなく吉江先生のような方にこそ似合うクルマだと思う。自分も当時の先生と同じような歳になったが、同じように Z が似合うのかというと、まだまだである。

南仏の高くはないが濃厚な赤ワインで、次期 Z の所感をお聞きしながら、吉江先生ともう一度呑みたかった。などと思う自分は、まるで実父に対するようである。第三者に父の姿を見るのは、吉江先生とアントニオ猪木ぐらいであろう。著書「お父さんプラハに行く」の通り、吉江先生は我々のお父さんだった。

ご冥福をお祈りします。

■ 硬派な先生 ■

森田 哲治（理学 24S/統計研究室/日産自動車/横浜市在住）

吉江先生の訃報を知り、深く残念に悲しく思っています。

先生と初めてお会いしたのは、大学 2 年の時の物理概論か何かの授業だったかと思います。その時に、4 年時の研究室は、絶対、統計研の先生のところに行こうと思い決めたことを思い出します。なぜなら、当時の自分は、物理についてあまり熱心な学生ではなく、勉強よりも、所属していた合気道部の活動と趣味のバイクに熱心な学生でした。先生であれば、こんな不勉強な自分でも、受け入れてくれそうに感じたからです。





▲辰野のご自宅に学生や卒業生が押しかけてはバーベキューをご馳走になった。“吉江亭”との愛称で呼ばれたことも（1995年6月）

4年時は、予定どおり、先生の研究室に入ることができました。研究室では、先生から自身のアウトプットに対しての責任を持って取り組む行動、マインドについて教えていただきました。卒論直前に、自分が作成した試験材料($\text{Gd}_2\text{Co}_{17}$ だったか?)に、問題が発覚し(自分の不注意により)、試材作り直しを何度も行った事を懐かしく思い出します。

自分の責任、やった事に対して落とし前をつける、これは、大学卒業後、社会人になってから、自分のベースにしている考えです。男として、落とし前をつけると、その時、先生から言われた記憶があります

(先生は、外からは軟派に見られがちですが、バリバリ硬派の方です。)

当時の自分は、足らないところだらけの人間だったと思います。そんな自分に、社会人として必要な指針を示して頂き、感謝しかありません。最後に直接ご挨拶が出来なかった事が残念でありませんが、本当に有難うございました。

クラウドファンディング一部始終

【竹下先生は、2019年度に複数の研究者の協力的研究活動を支援する試みとして、次年度(2020年度)の計画にクラウドファンディングを始めることを提案。

実行までの
うきよくせつ
紆余曲折と
裏話。果た
してその結
果は…。】

2019年度理学部は「シン・リガク大策戦」を始めました。当時私は、副学部長(研究担当)でこのプロジェクトの言い出しっぺの一人でした。

academist

academist とは?

研究者の方へ

大学・研究機関の方へ

企業の方へ

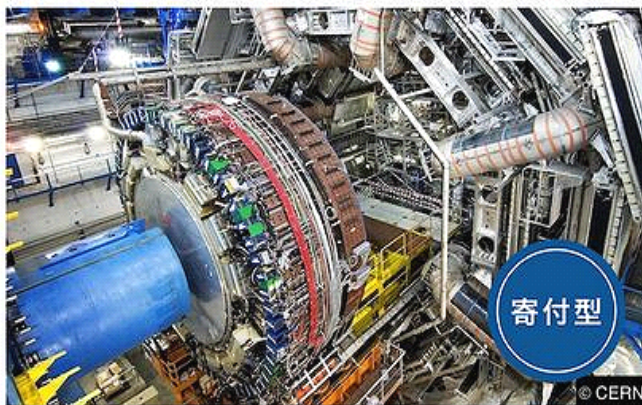
ログイン

新規登録

AIを活用して「質量が生まれる謎」に迫る！

fシェア

ツイート



竹下 謙

信州大学、特任教授

支援総額: 607,000 円

目標金額: 500,000 円

📊

達成率
121%

👤

サポーター
47人

🕒

残り時間
2日

支援する

▲クラウドファンディングの121%達成(目標額50万円/支援総額60.7万円)を表示する academist(アカデミスト)のホームページ (2020/12/8)

理学部事務の人たちのノリがよくトントン拍子に事が進みました。その肝は、理学部の各々の研究者の孤立状態（当時の竹下の気持ち）に風穴を開け、お互いの空気を送り込むことでした。比喻でない言い方をすると、分野の独立性と独自性を尊重し一人の研究者が一つの研究室を運営し、研究面において他の理学部内の研究者とはほとんど情報交換をしない状態でした。この状況を打破して、学際的部分の研究を伸ばすことが理学部に新たな展開をもたらすと私は信じていました。

その実働メンバーとして、ここ数年で急激に増えた若手研究者に期待を掛けて、複数の研究者の協力的研究活動を支援する試みを始めました。そして、これに続く次年度（2020年度）の計画として、クラウドファンディングを始めることを部局のプロジェクトとして提案していました。ここで私は定年退職をして、この件から離れました。

（2021 年 2 月 24 日）

竹下 徹（信州大学理学部理学科物理学コース 特任教授 理学部附属国際宇宙科学研究センター長／松本市在住）

学術分野にクラウドファンディングがあるなどとは思っても至らず



クラウドファンディングは、『寄付を募って何かユニークで企業的には向かない事を成し遂げ、その見返りを寄付（支援者）に還元する』と理解していました。私たちのような学術分野にクラウドファンディングを展開することなど思いも至らなかったのですが、アカデミスト社は、学術クラウドファンディングを支援する会社であることを信大URA (University Research Administrator)さんから聞きました。ウェブサイト (<https://academist-cf.com/>) を見るとクラウドファンディングにノウハウのない学術分野の人たちを巻き込んでクラウドファンディングを動かす会社であることがわかり、お話を始めました。もちろん支援額の一部をアカデミスト社はその収益として成り立っています。その後トントン拍子で話は進み、新年度（2020 年度）に実施することになり、理学部内で募集が始まりました。

クラウドファンディングを理学部でやってみることを始めた一人として、参加しないわけにはいきません。多分アカデミスト社との話で採用されないだろうと思いつつ手を挙げました。内容は、ウケ狙いの「AI」とアトラス実験による「ヒッグス粒子」の研究の組み合わせとしました。研究室には、すでに深層学習 (Deep Learning) と呼ばれる手法を用いて、アトラス実験のデータ解析を行おうとする若い助教と大学院学生達がいました。

そこでキャッチフレーズは、『AI を利用して「質量が生まれる謎」に迫る！』 (<https://academist-cf.com/projects/201?lang=ja>) ということになりました。アカデミスト社の人との本格的な話し合いが始まり、彼らの判断では、私の提案を含

む理学部からの3提案は全て「やってみる」事になりました。まあ失敗してもいいやと思いつつプロジェクトを進めるはめになりました。プロジェクトは支援金を目標額以上集めることで達成か否か判断されます。未達成の場合、プロジェクトはなかったこと（支援金をいただかない）になります。これは結構厳しい条件で、以後も大きな圧力になりました。

また募った支援金の使い方には、アカデミストからの指導がありました。当初は学生をCERNに送り込む費用として寄付を募る事としていましたが、このコロナ時代には無理だろうということと、形が見える方が良いという提言から激しく計算機を回す深層学習用の専用計算ハードウェアであるGPU（Graphic Processor Unit）としました。GPUはその名の通りパソコン・ゲーマー達の御用達品でリアルタイムで高速な画像処理のために開発された高級グラボ（グラフィックボード）の積載される特殊ハードウェアです。おおよそ計算機本体程度の値段です。計算専用のコアを多数（>100）積んだボードで、深層学習などでの重みの最適化のための繰り返し演算を高速に実行する時は、CPUの様な入出力よりは、計算そのものの繰り返しが主で、打って付けの代物です。これで目に見える投資に見合う出力を期待して、支援を募ることになりました。

まずは宣伝！ 知り合い、関係者、新聞や報道を全て使えと

目標支援総額は、CERN出張2週間分程度に設定した額ですので控えめな数字であると自分では思っていました。また支援を募る期間は2ヶ月と決められていました。ダラダラとはできません。支援者には、リターンと称する、見返りがあります。とても支援金額に見合うものではありませんが、それなりの物を用意する必要があります。この点でもアカデミスト社との話し合いの過程で決定しました。支援金も金額が、千円、五千円、一万円、三万円、五万円、最高十万円と各段階が決められており、それに見合ったリターンを用意する必要がありました。

何しろ質量の起源？ ヒッグス粒子？ なんて大多数の人には、無縁の存在であり、こんなことにお金を支援してくれる人は超少ないと思っていました。さて蓋を開けて、アカデミスト社からの指示は、まず宣伝でした。近くの知り合い、関係者、新聞や報道を全て使え、分けても今の時代SNSの活用であると諭されました。まずは、アカデミスト社のウェッブページに見栄えの良いプロジェクト紹介ページを作ることから始まりました。そしてメールアドレスの分かっている関係者には、すべてEメールを送りました。始めが肝心だそうです。もう恥も外聞もありません。とにかく応援お願い情報を垂れ流しました。地元報道関係者に声をかけて記者会見も行いました。とりあえず、地元には、少しは知ってもらったかもしれません。

SNSへの投稿では、直接の支援のお願いではなく、情報の拡散をお願いするというスタンスを取れと言われました。私はFB(FaceBook)とTwitterは時々書いていま

したが、新たに Instagram（インスタ）と TikTok を始めようと思いました。書き込みは、研究に関係のある事項に関するニュースや情報を披露せよとの指示でした。このため写真が最も印象強く人を引き付けると考え、さらに著作権にひっかからないように、自分の撮った写真だけに絞ることにしました。

幸い私のウェブページ (<http://atlas.shinshu-u.ac.jp/>) の奥底には、大量の写真が 20 年分くらい眠っていました。ほとんどは、私が世界の研究施設や会議に出張した際に撮ったものでした。その中からおもしろそうな物を探しては、一日 1 枚投稿する日々が始まりました。同じ写真を FB、Twitter、インスタに説明を付けて載せるのです。なかなかの苦痛の日々でした。とはいえ、過去の履歴を遡る機会にもなりました。残念ながら動画主体の TikTok は、私が歌って踊れないためついに投稿できませんでした。

これと並行して、アカデミスト社のウェブページの自分のサイトは、毎日見て、支援やコメントがあれば対応しました。その上、ここにプロジェクトに関する進捗状況を報告せよとの仰せでしたので、できるだけ頻繁に書き込みました。今みると進捗報告 33 件なので、ほぼ 2 日に一件程度、素粒子物理の用語解説や説明を書き込んでいます。このサイトでは、また支援者が現れると、メールが来ます。寄付額は不明ですが、一喜一憂の日々です。

より分かりやすく学術研究を知ってもらおう努力の必要性を痛感

最終段になると、アカデミスト社との会合も、目標達成ができるかどうか大きな話題になってきます。当初は、まあ達成できなくてもどうでもいいと高を括っていたのですが、そうも行かなくなりました。なんとかして支援額が目標額を超えるよう努力をせざるをえなくなりました。本物理同窓会からもご支援の申し出がありましたが、みなさま会員個人個人の応援のおかげでなんとか目標をクリアすることができました。感謝しております。最終的に数十人のご支援を得てクラウドファンディングと称するプロジェクトは目標を達成することができ、ホット一息つきました。

クラウドファンディングなどという大それた事に挑戦してみた顛末を書き記しました。いかんせん全てが初めてで、研究の面白さを伝える努力が支援金という現実的で個人個人からの応援としてカウントされる不思議な、今までに味わったことのない経験でした。この構図には、いまだにじっくり来ない面もありますが、ことが済んでしまったので、次にすべき事は頂いた支援金をいかに有効に使い、リターンに反映できるかであると思っています。

とはいえ、このプロジェクトで学んだことは、私たちのような学術研究の内容や成果や、あるいはここに関わる人間性のある研究が日常の生活を、より多くの人々

により分かりやすく知ってもらうための努力を普段から行っていく必要があるという事でした。大学や研究施設に暮らしていると、外界を忘れて、研究の面白さと学生との関わりに終始してしまいます。税金に支えられて研究していることは、深層意識に有りますが、実際に外界に対する情報提示をする努力を怠っていると感じました。

話が長くなりました。学術クラウドファンディングという大学にあるまじき行為に挑戦した事の顛末^{てんまつ}でした。大学人にとって珍奇な出来事から多くのことを学んだ2ヶ月でした。最後にご支援いただいた本会員の方々には、深い感謝を申し上げます。



▲2020年度から竹下先生が新たにスタートさせた、バーチャルな理学部附属国際宇宙科学研究センター
HP : (<https://www.shinshu-u.ac.jp/faculty/science/CIRU/>)

丹羽公雄氏(文理17)が「ポンテコルボ賞」を受賞しました！

丹羽さんと同期の遠山敏和さんから、当編集部に以下のような連絡をいただきました。一部紹介します。

○2月20日(土)丹羽氏からメールで「ポンテコルボ賞の内定通知があった」と連絡が入りました。「正式発表も同日にされた」とその後メールが続きました。さらに、「日本の新聞はポンテコルボ賞は扱わない」「ヨーロッパではノーベル賞に準ずる扱いである」こと。「やたらヨーロッパから祝電が届く」など私の質問に答える形でメールを受けました。

○通知から、「科学評議会が今年度のポンテコルボ賞を丹羽教

授に授与する決定を満場一致で承認した。授与式は9月23、24日である」と要点を知る。

○私は自分なりにこの賞について(恥ずかしながらその存在を知らなくて)調べました。

そして、朝日、中日、日経に「なぜ掲載しないか？」問い合わせをしました。新聞社自身そのことを不知で、私の問いかけで調べてはじめてその存在を知るぐらいの対応でした。

(「ポンテコルボ賞」はロシアが主体となりヨーロッパ諸国が協力して運営されている)

○流石、名古屋大学のHPには記載あり。新聞社もそれを検索して私の情報を信用した模様。

○信大以外の私の知り合いに知らせたら、「羽織袴で授賞式に出席するのですかね?」「お友達は素晴らしい研究をされたのですね。すごいですね。」等々の反響がありました。

(Pontecorbo はソ連に亡命したイタリア人科学者でその功績を讃え「ポンテコルボ賞」設立)



勝木渥先生の聞き書き記録の拡がり

～45 年ほど前に勝木先生は著名物理学者へ取材を敢行していた～

当会のホームページの問い合わせフォームに、山形大学 准教授の小幡圭祐さんから、勝木渥先生の聞き書きについての質問を頂いた。広根徳太郎のことを調べたいので、勝木先生の広根へのインタビュー記事を読みたい、とのこと。広根徳太郎は本多光太郎の最後の弟子と言われている物理学者で東北大学金属材料研究所の所長や山形大学の学長を務められた（國富信彦、「広根徳太郎先生を悼む」、『日本物理学会誌』, Vol. 50, No. 10 (1995)）。この件についてご報告したいと思います。

足助 尚志（理学17S・12SM/物性理論研究室 凸版印刷株式会社）

▲▼ 広根氏への勝木先生のインタビューは 1976 年と 1978 年の 2 回

そもそも勝木先生の興味は、本多の弟子であった広根が彦坂忠義と書いた 1931 年の論文 “Zur Theorie des Ferromagnetismus”, Z. Phys. 73 (1931) 62-73, に対して宮原将平が「変異遺伝子」と評したことにある（宮原将平、「回顧と展望」『物性』 13 (1972) No. 6, 354-36）。

宮原は強磁性体における自発磁化の概念を認めない本多光太郎の下から、一般には自発磁化を量子論的に説明したと言われる Heisenberg 論文、（奇しくも 2 つの論文のタイトルは同じなのだが）“Zur Theorie des Ferromagnetismus”, Z. Phys. 49 (1928) 619-636, の立場で広根・彦坂論文が出ていることに違和感を持ち、そのような言い方をした。一方、勝木先生はその批判をした。根拠として、直後に出ている本多の論文の中で、広根・彦坂論文が好意的に取り上げられていることがあった。更に論文の中身は無論のこと、論文の発信・受理・発刊の日付を丹念にたどりながら疑問点を整理されていた勝木先生は、広根へのインタビューを企画された。

インタビューは 1976 年 10 月 5 日、1978 年 4 月 3 日の 2 回行われた。その中では広根がこの論文を書いた経緯や、どのようにして Heisenberg の論文を読むに至ったかなどが明らかになっている。

広根は論文について次のように語る。（1976 年 10 月 5 日インタビュー：これは物理学会の分科会が山形大学で開かれた折、物理学史を研究するメンバーが集まって合同で実施したもの（中心は勝木先生））Heisenberg の理論というのは「大変立派な一応完全なもの」「ああいう論理の立て方としては完全なもの」としながら、

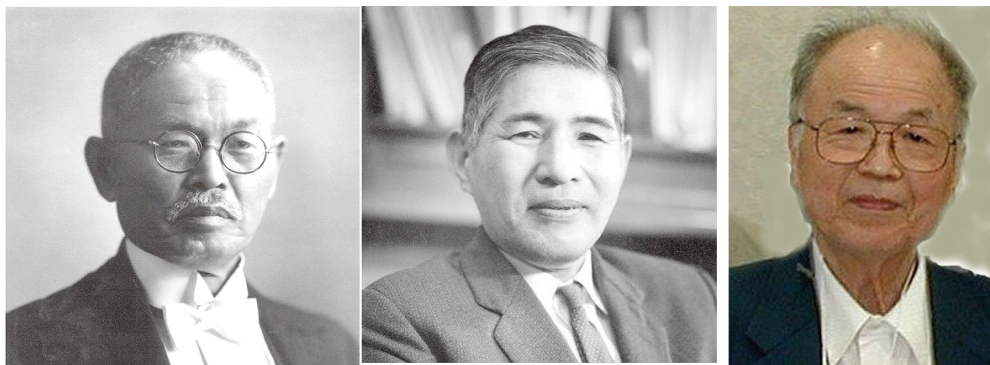
広根発言 23 : ……当時の気持ちとしては実験をよく説明できないような理論はあ



かん、というような気持ちがあったもので、おかしいじゃないか、それがもとで、この '31 年の論文は書かれていて、それで一寸した modification を、大した modification でもないんだが、すると、とにかく実験事実、それは Heisenberg とは比べものにならないくらいうまく説明できる。それで、ああいうものを作っちゃったので。あのもの自体は、もうあまり私自身はそういう論文だと必ずしも思っていない。

インタビュー自体は日本の物性物理学、磁性研究近代化プロセスの重要な位置を広根・彦坂論文が占めているという意識の基に行われているが、更に広根がどのようにして Heisenberg 論文を読むに至ったかが明らかになる。それは日本で量子力学の応用問題としての Heisenberg の磁性理論が知られる道筋の一つの発見であった。それまでは、2 つのケース、即ち Heisenberg の論文が発表され、それが評判になっていた頃にヨーロッパに留学して知ることになった茅誠司のようなケース、あるいは 1929 年に Heisenberg、Dirac が来日しており、その講演会を切っ掛けとした有山兼孝のようなケース、が知られていた。そこに更に異なる道があった。広根は、Hermann Klaus Hugo Weyl (1885~1955) の “Gruppen theorie und Quantenmechanik” (日本語訳は山内恭彦によって 1932 年に出版、ワイル著『群論と量子力学』) の最後の一行「この原理を強磁性の理論に応用した」と書かれている中から、文献としてあげられている Heisenberg の論文を知った、という。更に東北大学で量子力学を勉強するために勉強会（勝木先生は「固体電子論輪講会」としている）があったことなども語られており、量子力学が日本に浸透していく一つの道筋として興味深いものである（理研の「物理学輪講会」はよく知られている）。

物理学史的な面からのインタビューは、更に広根が何故物理学の道に進んだのか、第四高等学校から東北大学を選んだのか、Einstein に影響を受けた、実験物理で使用した機材が欧州のものから日本製と変わってきた時代だ、等々と掘りかきみせていく。



▲左から東北大学金属材料研究所初代所長の本多光太郎氏、第 8 代所長で後の山形大学学長となる広根徳太郎氏、信大物理学科に物性論研究室を創設した勝木渥先生

▲▼ かつて筒井康隆が「真の知性は全方位的だ」と言った意味は……

近頃巷で流行るものとして、「哲学コンサルティング」なるものがあるらしい。ピ

ジネスにアート思考を、とか、GAFA が専任の哲学者を雇っているとか。その一方で、大学にとって文系学部は必要ないという議論もあり、これは矛盾だ。「真の知性は全方向的だ」といったのは筒井康隆であったが、筒井も何かを出典としていたはず（まだ調べることができていない）。今、「真の知性」と調べてみると、一つに Einstein の言葉が出て来る。

The true sign of intelligence is not knowledge but imagination.

（知性の真の表れは、知識ではなく想像力である）

私たちは松本の地で物理を学んだことを共通基盤としているわけだが、大学で学んだのはそれだけだったのだろうか。

現在の信州大学のHPを見ると「全学教育機構」という組織があることがわかる。大学入学後、合格した学部を問わず、全員がここで一年間（以上）を過ごす。私たちの時には、同じような組織として、教養部があった（その後解体された）。受験勉強を乗り越え、やっと理学部物理学科に合格し、「さあ、これから相対性理論を本格的に学べるぞ」とか「量子力学を極めてやる」とか、言葉だけで知っている物理分野に専門的に取り掛かれると思ったら、何故か哲学をやったり社会学をやったり。『学問論』や『科学論』といった総合科目などというものもあった。

理由はいろいろとあるのだろう。「幅広い教養」「基礎的能力に基づく課題探求能力」、「豊かな人間性や国際性をもった人材育成」などといった言葉が理念には並べられているが、その根幹は昔からあったのではないか。

私が学生の頃は、春になると『どくとるマンボウ青春記』が生協に平積みになっていた。北杜夫（本名：斎藤宗吉、1927～2011 年）のマンボウものの一作で、前半は旧制松本高等学校時代のことで、松高の名物教師（同窓会員の多くがご存じの松崎一先生も登場）や個性豊かな学生が出て来る（辻邦生など）。現在、松本市には旧制松本高等学校の校舎が残り、傍らには旧制高等学校記念館がある。

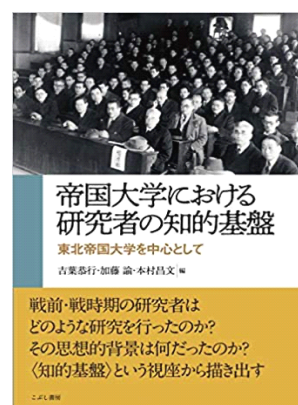
そこには当時「憂行」と称した北杜夫が思誠寮に残した落書きや、何を書いているか、私のような凡人には全く理解できない辻邦生の当時の文章が残されていたりする。私は高校時代までは遠藤周作、狐狸庵派だったのに、松本にきたら北杜夫を読まねばという変な義務感に駆られて、当時発刊されていた著作はほぼ全部読んだ。と、先程ネットで発見したのだが、信州大学図書館には 2015 年に「北杜夫文庫」が創設されているそう。北杜夫の奥様の斎藤喜美子さん、お嬢様の斎藤由香さんのご厚意で、蔵書のうち、663 冊（加えて絵画 1 点）が寄贈されているとのこと。自身医者であり、理系の冷徹な視点を持っている北杜夫は、高校時代のことを、人生の中で最も懐かしいのは旧制高等学校時代であるとしながらも「若い読者の意にそむくようだが、今の世に昔のままの旧制高校を復活させたとしても、一種のアナク

ロニズムに過ぎないであろう。私は日本人にとってもっとも必要なのは個人主義だと思う。かつての旧制高校の寮に於て、西欧なみの個人主義を貫きとおすことはむずかしい」（北杜夫『見知らぬ国へ』新潮社、2012年）と書く。

▲▼ 小幡さんから『帝国大学における研究者の知的基礎』を贈ってもらう

現在の学生会員の方々にとっては、旧制高等学校など、歴史の教科書に書かれているだけのことなのかもしれない。旧制高校の廃止が1950年、学制改革により松本高等学校は信州大学文理学部になった。70年も前のことだ。

旧制高等学校の学齢は現在の大学1年と重なる。文系と理系には分かれていたが、自治寮の中は玉石混淆、哲学を語れなければ仲間に加えて貰えなかった（その若者独特の思い込みを北杜夫は面白おかしく描いているのだが、それはさておき）。旧制高等学校への進学率は、0.4とも1%ともいわれている時代である。現在の大学とは比較にならない。旧制高等学校の超エリートたちにとってこの時代は、跳躍する前に一旦身体を縮こまらせる時、自己の内面を深めるモラトリアムの時代であった。



しかし世相は戦時色が強くなっていく。高等学校から帝国大学へ進学していく若者たちにどのような知的基盤が形成され、それを形成する背景には何があったのか、帝国大学の教授たちは、自らは何を持ち、これから国家を支える若者たちに何を伝えようとしたのか。東北帝国大学を中心にそれを調べた成果物として、右の書籍がある。

今回、お問合せを頂いたのは、この研究プロジェクトに参加されている山形大学人文社会科学部の小幡圭祐准教授からであった。この研究は科研費（基盤C）に採択されている。著作の中で、小幡さんの分担は医学者で第七代総長（1940～1946年）を務めた熊谷岱蔵（くまがいたいぞう：1880～1962年 経歴によると長野県塩尻の出身、中学は松本中学校。）の知的基盤についてである。「科学・技術・道の三位一体論」から熊谷の研究、医者としての活動、教育行政者としての仕事について分析されているが、膨大なる読書量、医学だけではなく、自然科学、西洋から東洋と幅広い人文、倫理、哲学分野の読書経験が人格形成に大きな影響を与えたとする。また医業六代続いた名家の長男である家庭環境、宗教観、書画を通じての交流までをフォローしつつ、熊谷の知的基盤に迫っている様子は徹底していて、納得感が高い。最後には戦時研究を推進した東北帝国大学と当時総長を務めていた熊谷の科学観が引き合いに出されるが、総合的な人格形成の重要性を自覚し、実践していた熊谷が戦時の政治状況に対して批判的ではなかったことが挙げられる。ここに矛盾はなかったのか、現在の視点からすると、やはり先を知りたくなる。

他の方の研究としては、帝国大学へ入学する前の旧制高等学校の校長の思想（旧制高校では校長と学生の距離が近かったようで、影響は大きかったようだ）、学生寮の中での人格形成。例えば一高（東京大学）と二高（東北大学）の寮の成り立ちの違いなどは興味深かった。一高は通学生や留学生がいるために、多くの思想が混在しているのに対して、二高は仙台の街の中に明善寮の他、多くの寮があったが、学校の影響が強い。また東北帝国大学では、多くの研究所が戦中にかけて付設（1940～1945年の間に8つの研究所の増設）されているが、その経緯の詳細、人物としては、熊谷以外にも法、生物、機械、人文学者が取り上げられ、その思想基盤が考察されている。物理学者は直接の対象になってはいないが、東北帝国大学総長だった本多光太郎や第四高等学校出身では中谷宇吉郎の名前が見える。

研究は本の帯にあるように、戦前、戦時期が対象になっている。戦前から教育的指導者の立場にあった人々が、敗戦を経て戦後という時代にどのように向き合ったのかはこれからの研究課題とされている。戦後の教育の中で、戦前の教養主義と戦後の民主教育はどのような位置関係にあるのか、完全に断絶しているのか、あるいは連続性があるのではないか。先を知りたくなる。

信州大学にはかつて教養部があり、今は全学教育機構になっていることは上述の通りだ。山形大学のHPを見ると、学士課程基盤共通教育機構というのがあり、それが相当するようだ。

広根徳太郎は山形大学の学長を12年（1970～1982年）務めている。やはり全国の大学で教養部、教養課程というものを模索していた時代であったようで、それは現在でも教養とは何か、大学で何を教えるか、人をどう育てるのか、にも続く課題だろう。そのような問題意識もある、ということをお幡さんからメールで頂いた。人文系の研究者の方が、広根のインタビューからどのような事を読み取られるか、興味があるところで、今後の研究の進展に期待したい。

なお、以前にも紹介しましたが、勝木渥先生のお仕事に興味のある方には、2018年2月11日に大阪梅田の関西学院大学梅田キャンパスで開かれた「勝木渥さんを偲ぶ会」（環境物理学者 勝木渥さんの軌跡と現在）の記録としてまとめられたCD（中には記録（偲ぶ会の記録）、弔辞、資料（勝木先生が様々なところに書かれた文章）がある）をお分けいたしますので、当会HPの問い合わせフォームからご連絡ください。（→ <http://www.supaa.com/postmail/postmail.html>）

【補足】文中に登場する物理学者は物性関係の方には馴染みのある名前と思われるが、以下に私見を交えて簡単にまとめておく。

本多光太郎（1870～1954）

物理学者、金属工学者。K S 鋼、新K S 鋼の発明者。東北大学総長。第一回文化

勲章受章者。「鉄の神様」と呼ばれ、鉄鋼の世界的権威。物理学者としての本多光太郎を再評価したのが、河宮信郎であり勝木先生であった。本多の磁性理論は今日においては残っていないが、私は本多スクールの活動（理論研究と実験と新材料開発等々を通して）をして、1920 年頃に日本の物理学が自立してきた、と考えている。

広根徳太郎（1906～1995）

ご本人のインタビューを読むと「実験家」といい、ある人は「理論家」といい、また特許取得にも積極的だったので「発明家」であり、各種委員の歴任から「科学行政官」であり、山形大学学長まで務められる「教育者」でもある。勝木先生が研究された広根・彦坂論文を通してしか、広根のことは知り得なかったのであるが、調べていくと様様に面白いことが出てきそうである。広根・彦坂論文については、勝木渥、「本多の磁気理論と、わが国における Weiss 理論の受容の過程Ⅴ：聞書きにもとづく物性物理学史(3)」、『物性研究』（1981）、36(6)：355-412 に詳しい。

彦坂忠義（1902～1989）

彦坂については調べられていない。困った時の Wikipedia によれば、原子力物理学、新潟大学名誉教授、となっている。以下に引用した東北大学ゆかりの研究者たちを参照されたい。日本における原子物理学、量子力学研究の先駆者の方であったようだ。

（<http://www.nucl.phys.tohoku.ac.jp/~hagino/lectures/nuclphys2-10/hikosaka.pdf>）

宮原将平（1914～1983）

北海道帝国大卒業後、東北帝国大の本多光太郎研究室に学ぶ。名古屋帝国大学を経て、戦後名古屋大学において坂田昌一とともに物理学教室創設に尽力。1949 年北大教授となり、のち中央大教授。固体物性論が専門、半導体の強磁性を電子論の観点から研究した。北海道大学名誉教授、日本物理学会会長。宮原の学生時代に北大で開講された茅誠司による講義のノートが、『茅教授磁性体論講義』として日本物理学会に残されている。英語とドイツ語とカタカナと漢字が入り混じったノートは当時の雰囲気伝える貴重なものであるが、字の踊り方は解読に苦勞を要する。これは日本で初めての近代的な固体物理の授業であったと考えられている。宮原は恩師である有山兼孝とともに、勝木先生が尊敬していた先生のお一人。

情報通信業界の最前線から



当たり前となったテレワーク勤務、その実態は？

2020 年から始まったコロナ禍で、幾つもの企業で働き方が大きく変わってきました。私の勤務する会社では、もともと、出張先からの利用や、帰宅時や休日の利用、出社勤務に制約がある人などを対象としたテレワークの仕組みが用意されてはいたのですが、2020 年 4 月に発令された第 1 回目の緊急事態宣言により、それまで一部許可された人や、一時的な利用を対象にしていたテレワークが、通常の勤務制度へと一気に変わりました。我が社に起きている変化について、その実際について、個別の事象に分けて見ていきます。匿名としてですがご紹介します。

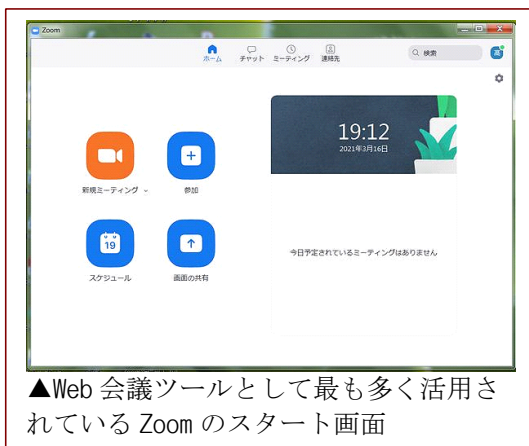
●● 業務は、音声と画面共有の Web 会議に一気に置き換えられた ●●

それまでも、出社して 1 日中パソコンの前で仕事をするという勤務が多かったためテレワークを新たな勤務制度として認めてしまえば、意外と仕事上の支障は無く、もっとも、支障があると思われた顧客先などへ出張して打ち合わせするなどの業務も、社会的にテレワーク推進が認められると、音声と画面の共有で進める Web 会議に一気に置き換えられて行きました。

既に数年前からコンピュータ業界では、物理的なサーバを身近に置くスタイルからインターネットのクラウド上に置いたサーバで、開発から業務運用まで行うということが普通になり、ネットワークに繋がっていれば出社しなくても仕事出来る環境が整ってきていたところに、政府からの要請という大義名分が出来たことで、一気に自宅で仕事をするというスタイルが定着してきました。以下にテレワークで使われるアイテムの紹介をします。



(シルク S で加工)



▲Web 会議ツールとして最も多く活用されている Zoom のスタート画面

Web 会議：テレワークと言えば Zoom 会議や Skype 会議と言われるほど当初利用されましたが Zoom はセキュリティ面の指摘から利用禁止を決めた企業が出て、Skype は通話品質の問題で提供元の Microsoft の製品戦略から Teams に置き換えられて行きました。ただし、今現在も 100 人を超えるような多人数とのやり取り (Webinar：Zoom の上級機能

で 1000 人の入室が可能) は Zoom の独壇場のような感じです。私的利用ではビデオ ON での利用が多いですが、業務の利用では音声と画面共有のみが多いようです。これも会社によりけりで、業務でもビデオ ON 必須というところもあります。

チャット：社内のちょっとしたやり取りにメールだと効率が悪いですが、チャットであれば気軽に出来ます。込み入ったものなどは、音声のやり取りに切り替えてなど、柔軟にやり取りすることで、コミュニケーションを円滑に進めることが出来ます。

ステータス通知：テレワークで直接相手が見えない状況では、忙しくて手が離せないのか、席にいないのかなどがわかる仕組みが必要です。チャット機能とセットでステータスを緑や赤などで表示する機能が常用されています。

利用状況監視：こちらは意識されていませんが、ステータス通知と表裏一体で勤務開始後パソコンの前で仕事をしているか監視する機能がテレワークでは使われています。マウスやキーボードの動きが一定時間無ければ離席と判断するため、しまいには自動的にマウス動作をさせる USB 機器なども売られるようになり、企業側も許可していない USB 機器を無効とするソフトを導入するなど、密かにイタチごっこが始まっています。

打刻：打刻と言えば昔はタイムカードでしたが、数年前にパソコン上で打刻する仕組みに変わっていたことが、今回のテレワークでは役に立ちました。打刻して就業時間を把握して残業代などを支給するということは法律上必要なのですが裁量労働制などで法制度が変わると大きく変わるかも知れません。

スケジュール管理：打ち合わせのスケジュール設定では、Web 会議の場合に接続情報を把握してくれるため、開始時にどこに接続するなどで慌てなくなることと、ステータスに反映してくれる便利さから、以前よりもマメに埋めるようになりました。

ファイル共有・管理：テレワーク前からファイル共有は利用されていましたが、イントラネット内にファイルを保有するタイプから、インターネットクラウド上にファイルを保有するタイプに変化しています。一昔前ならセキュリティ面を問題とされていたと思われますが、今では拒否感が少ないようです。

VPN：テレワークが成立するのは、家庭や貸しオフィスなどのネットワークを利用しても経路を流れるデータを暗号化することで、安全に会社に接続できるようになったからで、その基盤はVPN（Virtual Private Network）となります。利用状況監視と同じく、各利用者がVPNで接続を開始してから切断するまでの時刻を管理することで、テレワーク業務時間を把握してます。

SNS：企業内SNSなるものが導入されましたが、仕事としての使い方が手探り状態（不明）で今ひとつ盛り上がっていないようです。（サボりに見えるとか）

貸オフィス：自宅では都合が悪い事情が発生したり、物理的に集まる必要が発生したりした場合に、貸しオフィスを利用するということが進みました。もともとは、出張して会社に戻るよりテンポラリのオフィスで仕事が出来ればということで始まった貸しオフィスですが、全員が出社すると事務所が足りなくなる程、会社がオフィスフロアの解約を進めたため、代わりに貸しオフィス利用が定着してきました。

印刷サービス：会社ではプリンタは共用機器であり、テレワーク機器にプリンタが含まれないため、紙へ印刷するためコンビニ設置のプリンタに出力するという

サービスが提供されています。(大量印刷の場合は結局出社することになります)

電子印鑑：紙書類のやり取りが無くなっていくため、電子印鑑なるものが導入されましたがシステムでの電子承認と独立な、ファイルへの承認印という仕組みの必要性が今ひとつなのと、費用発生と設定の面倒さから、普及していないようです。

今回の結論としては、テレワーク環境を実現するためのITツールが、ほぼ揃っていた中での緊急事態宣言で、一番遅れていた「人の意識改革」が一気に起きたことで、テレワークが定着したと言えます。

ただし、何年もテレワークが継続して、**職場での技術継承が出来るのか?** とか、**新しいチームの立ち上げや新規事業の開始が可能なのか?** など、今後未知の課題と取り組んでいく必要があるでしょう。

最近読んだ本／書評②



石井俊全(いしいとしあき)著『一般相対性理論を一步一步数式で理解する』によって得られたもの

私たちが書物からの文字情報によって得られるものは計り知れないといっていだらう。新しい知識、物事の分析、人生の指針、感動、……などなど、生きる上で必須アイテムといってもよい。ここは、出合った本について当会会員による書評を紹介するコーナー。第2回目は当会報編集委員の武原さんが、1年以上かけて読了したという本。学生時代には理解していなかった事が理解できたという。

武原 一記 (22S/統計研究室 富士通株式会社 千葉市在住)

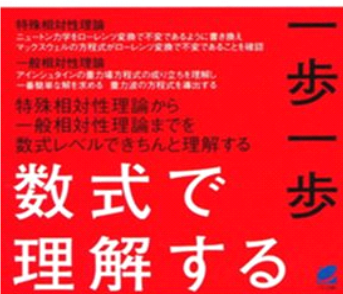
★★★ 塾で丁寧に教えてくれるような感じで…

この本を購入したのは2017年5月頃で、重力波の観測に対してノーベル物理学賞が授与されたのが2017年末だったので、重力波ブームとなる前ではありましたが、2015年末の一般相対性理論100周年のイベントや、2016年の重力波検出の発表などで、一般相対性理論が話題となり始めた時期でした。

物理学科を1991年に卒業して後、30年近い時間を経過していまし

一般相対性 理論を

石井俊全 著
平装 2017年10月10日発行



発行 ペレ出版
ISBN 978-4-86064-498-7
ページ数：672ページ
サイズ：A5判 並製
価格 定価3,850円(税込)

たが、その間も、量子力学や相対性理論について、しっかり理解したいという思いがありました。(物理学科を卒業しておきながら、しっかり理解していなかったということか...)アインシュタインの重力場方程式にいくつかの条件をつけるとニュートン方程式と同様なものが導き出せるというのは、そうだろうなと思ってはいても、見た目の式の形は全く違うので、どうするものかと迷子状態のところ、この本には丁寧に書いてあり理解することが出来ました。

本書は参考書のような体裁で、「はじめに」に、各章で学ぶ内容と各章の繋がりが図示されています。最初の数章は基礎的な内容が記載されていて、読み飛ばすことも可能で、自分の知りたい場所から読めるようになっています。各章では、定義や公式は枠で囲ってあり、適宜出てくる問題は答えに至る数式の経緯が丁寧に記載されています。(このあたりが長い題名に込められているようです) 2色刷で、本文の重要な部分が赤色に記載されているのと、手書き風の書体でノートの書き込みのような注釈が書き込まれていることで、普通なら自分が理解した後に書き込むような内容が最初から書かれていて、つまずきにくいものとなっています。

体裁だけで無く、内容的にも、例えばテンソルなどはしつこいくらいに書かれていることで、後々の一般相対性理論の数式を扱うスキルを身につけることが出来るようになっていました。(途中テンソル場の微分なども必要となるのですが) そもそも、当初読み始める前は、テンソルというものも理解出来ていなかったのがようやくわかったという感じです。

基底の取り替え(変換)が強調されていて、ベクトルであれば数字を1列に並べたものはベクトルではありますが、それだけでは不十分で、大きさや向きのような実体を持つということから、数学的には基底を変えても実体(大きさや向き)を変えないような数値の変換ルールがあることと同じで、テンソルも行列のように数字をならべたものではあるが、基底を変える際の変換ルールに要点があることがわかりました。著者も通常の物理の本では基底変換の部分の記述が少なく、成分の書き換え則だけではテンソルの実体を理解し難いと書いていました。

実は著者は物理が専門では無く、経歴的には数学が専門で、前著書もガロア理論をやはり一般の人が理解していくための本だったのです。このため、本書でも、一般相対性理論について特に新しい内容が書かれている訳では無くよく知られている内容の範囲で、それが丁寧に数式を迫りかけるように書かれているだけなので、(この書評を読まれている方のように)既に一般相対性理論を理解している人にとっては無駄な内容になると思いますが、私のように落ちこぼれていた人には、塾で丁寧に教えてくれるような感じの本でした。

一般相対性理論について、再度学び直してみたいという方にはお勧めです。(実は、私はこれを読むのに1年以上かかったのですが。

カレーと私

【はじめに】 信大物理同窓会報の編集委員からの、なんでも良いから何か書いてくれ、との依頼を受け安請け合いしたものの、サラリーマンの自分に物理や学問のことなど書けるわけもなく。仕事の専門はコンピュータシミュレーション (CAE, Computer Aided Engineering) なる結構アカデミックな領域で、流行りの AI も Deep Learning の活用も進めているが、自分は長いこと泥臭いマネジメントに携わっている身。

インドに 2012 年～2015 年の 3 年ほど赴任していた経験、そしてインドと言えばカレー、ということでカレーのことでも書いてみる。尚、以下単なる一個人の経験に基づいた独断と偏見によるものであり、文化的若しくは学術的な検証などは何もない、結論も何もないことを最初にお断りしておく。

名取 奏 (理学 23S 統計研 吉江研究室, 日産自動車(株), 東京都町田市在住)

●● 1. 南インドのカレー ●●

自分が 3 年間住んでいたのは、インド四大都市のひとつと言われる南インドのチェンナイ、かつてマドラスと呼ばれていたところである。季節はシンプルに Hot-Hotter-Hottest の 3 シーズン、蚊は Hot のシーズンに現れ、Hotter シーズンになると暑さで消え、Hottest になると気温は普通に 40 度を超える。とにかく暑いところである。そんな暑いチェンナイから神奈川に仕事で送ったインド人は、日本ではエアコンが効いてなくて暑くて辛いと嘆いていた。



インドのローカルフードはカレー、若しくはカレー味の何か。あるいは辛い何か。マクドナルドやケンタッキーもピザも中華料理も、何故か辛い。そして南インドのカレーはインドの中でも特段辛い。暑さと辛さは比例しているような気がする。辛い料理ばかりの理由は、暑さに加えて物流のプアさ、食材の質の悪さからだと理解している。40 度以上の炎天下の中、直射日光を浴びたまま卵など生鮮食料品が運ばれる。野菜は干からびているか堅いかやたら巨大で味のないものが多い。濃い味のカレーにするのが一番旨いのだろう。

●● 2. 油とカレー ●●

インドの赴任先は、小職の勤める日産自動車と Alliance 先であるフランス Renault との合弁エンジニアリング会社 Renault Nissan Technology & Business Center India なる長い名前の会社。タスクは自業務の組織立ち上げと拡大。総従業員

員数は赴任当時の 2012 年で 3000 人強、帰任時の 2015 年で 6000 人強、今は確か 8000 人ほどと、日本での知名度はゼロだが結構な規模の会社である。自分の部も赴任期間の 3 年でほぼ倍の 200 名以上になった。インドの成長スピードを身をもって実感できたのは良い経験で、「明日は確実に今日より良くなる」というポジティブな社会の空気は、本当に心地の良いものだった。日本の若者にもこういう感覚を味わって欲しいと切に思う。

そんな急拡大の中で採用したマネジャの一人が、アメリカで博士号を取り、形状認識に関する論文で Society of Automotive Engineering で賞を取るような天才博学。人柄は謙虚で穏やか。要するに凄い人だった。

こういう人を結構あっさりと採用できる人財の厚さがインドにはある。彼の父親が有名な医学博士ということもあり、彼自身「健康には人一倍気にかけている、だから食用油を月にたった 3L しか使わない」とのこと。インドの一般家庭では 5L 以上、ひと月に使うらしい。

そういえばスーパーに行くと、車のオイル缶のような容器で食用油が売られている。冷えたカレーの上澄みは、分厚い油の層である。以前「インドでは認知症が少ない、理由は健康に良いインドカレー」というような記事を読んだが、スパイスと油の塊りが健康に良いわけではない。だいたいインドの平均寿命は 65 歳、認知症になる前に亡くなる。尚、自分が赴任してた頃の平均寿命は 60 歳だった。様々な面で、例えば物乞いの変化などを見ても、インドは確実に良くなっている。

●● 3. ベジカレーとノンベジカレー ●●

インドではベジタリアンはノンベジタリアンより多い。ベジタリアンの料理は、ノンベジタリアンの料理と調理器具も皿も分ける必要があり、また調味料の中に肉・魚のエキスが入っていてもダメ。煎餅などに魚のエキスが入っていることもあるので、日本土産の成分にも注意する必要がある。インド人とイスラム教徒にとって、なんでも食べて、英語がまともに通じない、公共の場でもまともな英語表記のない日本に住むのは本当に大変だと思う。

ベジタリアンのカレーはベジカレー、ベジでないカレーはノンベジカレーと、何のひねりもなく呼ばれている。肉も魚も入ってない、さして味のない野菜だけで作



▲①チェンナイ自宅からの景色、綺麗に見えるがドブ川で道にはゴミ ②インド人と仏人で構成された我が部のマネジメントコミッティ、Dr や MBA、日本語話せる人も

られたベジカレーでも、ノンベジカレー同様スパイシーでコクのある味になる理由は、前述の通り油と香辛料の塊だからである。

ノンベジカレーは、鶏肉、マトン、魚が入っている。豚、牛肉は食べない。鶏肉は生きた鳥のさばきたてか、冷蔵・冷凍設備のある高級スーパーで入手可能。マトンはどこで入手できるのかわからなかった。魚は海近くの道沿いで炎天下の中、道の上にそのまま並べて売られており日本人にはかなりハードルが高い。インド駐在の日本人は、肉・魚・酒類などをバンコク・シンガポールなどで買い出して、巨大な冷凍庫に保存しておくのが常である。

●● 4. 結婚式のカレー ●●

同僚の結婚式にも何度か呼ばれた。結婚式といっても、服装はいつものTシャツにサンダル。指定された時間帯に適当に行って、列に並び、順番に新郎新婦と写真を撮り、終わったら食事をして帰るだけである。そして、食事は当然カレーである。

会議室にあるような細長い机に適当に並んで座り、バナナの葉の皿に、おっちゃんがバケツで次から次にカレーやビリヤニをよそう。それを右手で食べる。もういいとなったら、バナナの葉を折れば終了。皆で腹いっぱい食べるのは幸せなことだから、とのことらしく、素朴でとても良かった。日本の結婚式もこういうシンプルさを真似たらいいのになと思う。

手を使ったカレーの食べ方は、右手中央3本の指で混ぜてすくい、親指で押し出す。ナンも右手でちぎって食べる。ちなみにナンは高級品で、あまり一般的な食べ物ではない。カレーを手で食べるのは、味覚・嗅覚・視覚に加えて触覚でも味わい楽しむため、とのことだが、これは最後まで慣れなかった。いくら手を洗ってもカレーの香りが指から取れない。



▲③インドの結婚式 ④結婚式でのカレー

●● 5. 日本にいるインド人のカレー ●●

教育や業務のために、多くのインド人をインド国外に送った。主に日本、フランス、アメリカ、少数だがルーマニア、韓国やベトナムにも。短期の出張だけではなく、半年から2年ほどのケースも多数。彼ら彼女らは何の戸惑いもなく、喜んで1,2年インドの外に出ていく。そしてその彼ら彼女らが彼の地で何を食べるかというと、

カレーである。

インドにいる頃と全く同じように、昼は仲間で集まり、お互いのカレーをシェアしながら、右手で食べる。インド人はフットワーク軽く世界中で活躍しているが、食に対してはびっくりするぐらい保守的である。日本に送った同僚の一人に、日本料理で何が一番好きかと聞いたら、CoCo 壺のチキンカレー、3 辛とのこと。

その一方、チャレンジだと言いながら牛タン牛カルビ豚バラを旨そうに食べるインド人も、いるにはいる。人によるのは世界共通、きっかけを待っているインド人はまあまあいる。日本にいる身近のインド人に、彼らがダメというものも一度ぐらいは勧めてみてもいいと思う。でもしつこいのは絶対ダメ、勧めて一度だけ。相手の文化をリスペクトするのはダイバーシティの基本である。

●● 6. 社員食堂のカレー ●●

赴任時代、昼食はインドローカルのメンバが使うレストランで食べていた。少量のカレーが複数ついたミールスと呼ばれるカレー定食や、炊き込みご飯カレー味のビリヤニが好きだった。どちらも南インドらしく暴力的に辛い。チャーハン (Fried Rice) や焼きそば (Fried Nudle) もあるが、何故かカレーがかかっている。値段は、50～150 円程。社員食堂のカレーは安くて旨いから毎日食べてるよ、と職場の若手と話した時の返答が「いや、自分には高いです。だから毎日弁当です。社員食堂のカレーを好きなだけ食べられるようになりたい、そのために実力をつけたい。だから仕事は何でもやる、難しい仕事を一杯やらせて欲しい。」

インド時代のメンバ、若手もベテランも皆優秀。正直ポテンシャルは日本の職場以上。その優秀な彼らが、これだけガツガツと食欲に仕事をしたいというモチベーションを持っている。しかも、そういうメンバを3年で簡単に100人以上増やせるぐらいの人財の厚さがある。今の豊かで少子高齢化の日本で、こういう食欲さを持った人を大量に集めるというのは無理な話。こういう国を向こうに回して、日本は将来どうやって生き残れば良いのだろう、と当時抱いた危機感は今も変わらない。



▲ミールスと呼ばれるカレーの定食

●● 7. My Vision とカレー ●●

赴任直後、新たに着任した日本人管理職がリーダ層以上の従業員全員の前で、抱負と Vision を語るという場があった。自分の前に語った赴任者は以前からの飲み友達だったが、実は信州大学工学部出身なのをその時初めて知る。社会に出てから

初めて広がった大学人脈だった。本当はもう少しシステムティックに広げられると仕事の面でも色々と助かるのだが。

何も考えていなかった自分は「Visionは無いが、チキンカレーとチキンビリヤニは旨い。旨いカレーを食って、インドに尽くしたい」と、かなり適当なことを話した。翌日、その場にいなかった食堂食券売り場のおじさんに「チキンカレーでいいな」と言われ、社食内を歩いていると「チキンビリヤニの列はあっちだ」と知らない人から声を掛けられた。自部署のマネジャ達からは素晴らしいスピーチだと褒められ、ある有名なコンサルからは、これこそ Real Vision だとのコメントを頂いた。素直に思ったこと言っただけで、想定外の反響である。カレーには世の中を変える力があるのかもしれない。



▲チキンビリヤニは旨かった

●● 8. カレーマルシェ ●●

2015年3月にインド赴任を終え、続いて3年ほどフランスへ行くことになる。フランスは酒と飯は旨いが、カレーに出会うことは無かった。日本で有名なカレーマルシェは、フランスには無かった。ちなみにマルシェの意味は市場、カレーマルシェを直訳するとカレー市場である。日本にはよく読むと変なフランス語がいっぱいあるが、海外にも変な日本語はいっぱいあるので気にすることはないと思う。新鮮な肉も魚も野菜も普通に入手できるフランスで、それらをスパイスと油まみれにしたカレーにする必要は無いだろうし、だいたいカレーに合うワインなど想像つかない。

フランス赴任中は欧州内をよく旅行したが、カレーに出会えたのは、ドイツでソーセージにカレーをかけたカリーヴルストぐらい。ビールに合うつまみだった。

P.S. 本散文のドラフトを事務局に提出した直後、吉江先生ご逝去の連絡を頂いた。吉江研究室出の一人として本当に残念、研究室で様々な本を眺めながら旨い日本酒をご馳走になりつつ、様々なお話を伺ったのが良い思い出です。心よりご冥福をお祈り致します。

おくやみ申し上げます

1月21日に中村光廣名古屋大学教授(理学11S)から当会事務局に、以下の連絡をいただきました。野坂徹さん(10S/学年世話人 松本大学勤務)の訃報でした。

.....

昨日、10Sの野坂徹さんが、昨年2020年12月21日松本協立病院で亡くなられたとの知らせを奥様からいただきました。野坂さんは信大で学部、修士を修められたあと名古屋大学の博士課程に進学し、宇宙線モジュレーションの研究で学位を取られました。その後松商短大、松本大学へ就職され教員をしておられましたが、病を得られ長い間闘病生活をしておられました。ご冥福をお祈りします。

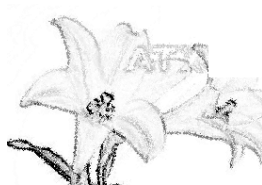
私にとっては自然科学研究会の1年先輩であり、名古屋へ来られて松本へ就職されるまでの間は、共に常念をはじめとする信州の山々に登った山仲間でありました。すでに伝わっているかも知れませんが、可能ならば10Sの同期の方々や自然科学研究会の方々にお伝えいただければと思います。

同期の福井さんから次のような追悼文を寄稿いただきました。

■ 野坂徹君を偲んで ■

福井 達之（10S /宇宙線研究室 桔梗が丘司法書士事務所 名張市在住）

私は野坂君と同期で3年4年の時は同じ下宿にいたのでとりわけ思いが深いです。私たちのクラスには「ノサカしい」という言葉がありました。勉強するために物理科に入った人の生活態度全般をほめたたえる言葉で、とうぜん彼を見て皆が使うようになった言葉です。男らしい男、たのもしい夫、うるわしい乙女、ノサカしい学生・・・こう言う使い方をした言葉でした。



私は勉強は苦手だったので、彼に授業について聞くとかそういうことはあまりなかったのですが、湯川先生を尊敬し一筋に学問に取り組む姿はクラスの中でとても貴重でした。今回彼の経歴を聞くと、学生時代の大志を遂げたのだと改めて感心しました。ノサカしい教え子たちを沢山育てたことと思います。改めてご冥福をお祈りします。

T O P I C S

□ 日本学術会議の梶田会長、「法に従って任命求める」

日本学術会議の梶田隆章会長ら幹部が2月25日、定例の幹事会後にオンラインで記者会見し、菅義偉首相による会員候補6人の任命拒否問題の解決を改めて要求し

た。6人の再任命について政権側が「任命の手続きは終了した」としていることに
対し梶田氏は「本当に終了したと言えるのか議論の余地はある。法の定めに従って
任命を求めていく」と強調した。

学術会議法は会員数を210人と規定。任命拒否が原因で欠員が続く事態について、
梶田氏ら幹部はこれまで「会議の独立性を侵す可能性がある」との見解を示してい
る。

記者会見では、会議の在り方の見直しを巡る会員らへのアンケート結果の概要も
公表した。任命拒否問題に言及する回答が多く「解決が望まれる」などと求めた例
もあったとしている。

学術会議の改善の必要性に言及する回答も目立ったほか、提言機能や情報発信の
在り方についての言及もあった。今後、内容を精査して見直しの議論に反映させる。
4月に予定される総会で一定の結論を出す方針。

(信濃毎日新聞 2/26 より)

□ 次期第15代信大大学長に中村宗一郎氏が選任される

信州大（本部・松本市）の学長選考会議（議長・荻上紘一東京都立大名誉教授）
は3月10日、委員17人による投票を行い、理事（研究、産学官・社会連携担当）
で副学長の中村宗一郎氏
（67）を次期学長に選ん
だ。10月1日付で第15
代学長に就任する。任期
は6年。

中村氏は選考後、松本
市の信大松本キャンパス
で記者会見し「信州を元
気、豊かに地域の未来を
開く信大をつりたい」と
強調。「大学は何を置いて
も人づくりが重要」とし、
社会で信頼され地域貢献
できる人材を育てるとし
た。

選考会議の委員による
投票は、中村氏とバイオ
メディカル研究所長の斎
藤直人氏（61）、学術研
究院医学系教授の本田孝
行氏（65）の候補3氏を
対象に実施。最初の投票
で中村氏と本田氏が各7
票、斎藤氏が3票を得
て、決選投票の結果、中
村氏が9票で本田氏の8
票を上回った。

時の顔

国からの運営費交付金減少や、少子高齢化社会での学生獲得、新型コロナウイルス下の教育環境の充実…。難題山積の中、次期学長として信州大のかじ取りを任された。10日の記者会見では「身の引き締まる思い」と表情を終始緩めなかった。

学生への教育や研究指導を通じて自分自身が成長したとし「人は人によって育てられる」と実感。大学の原点は人づくりだと信じ、「信頼され、大切にされ、地域を引っ張る人材を育てた

信大次期学長に選ばれた
中村 宗一郎さん

「新しい」とする。新型コロナウイルスで学生は不自由な生活を強いられているが、授業は対面とオンラインだけでなく、VR（仮想現実）技術などの活用も構想する。

8学部で幅広い研究に取り組む県内唯一の国立大として、産学官連携の重要性も意識。首都圏などの人材に県内企業で課題解決を担ってもらう学術研究・産学官連携推進機構のプログラムをさらに発展させる意向だ。

専門は食品化学。遺伝子工学の技術を使い、タンパク質の機能を表せる研究に力を注いできた。

1994年から通算4年ほどカナダで研究に従事。ロッキー山脈などの雄大な自然が、学会などで訪れていた信州の風景と重なり、「非常に魅力を感じた」。島根大教授を辞し、信大農学部に移った。

自身の性格は「愚直」。趣味は日曜大工だが、なかなか時間が作れない。ふらりと巡る温泉に漬かるのが息抜きだ。2人の子ともは独立し、松本市内で妻と暮らす。67歳。

選考会議は昨年 11 月に 3 氏を学長候補に決定。所信表明を聞き、委員間の意見交換を重ねた。1 月 19 日～2 月 25 日、教職員に意向を聞いた結果では、本田氏が適任との回答数が 319、斎藤氏が 228、中村民が 226 だった。教職員の意向とは異なる選考結果となった点について、荻上議長は「意向聴取の結果を参考にし、委員間で十分かつ慎重に意見交換、議論をした結果だ」と述べた。

(信濃毎日新聞 3/11 より 右上記事も)

卒業にあたり信大生活を振り返る

【この 3 月の卒業生に信州大学での学生生活を振り返っていただきました。物理学の難しさと面白さの体験を今後活かそうという、卒業を迎えることができた喜びが滲み出ています。おめでとう。】

■ 大学生生活を振り返って

◎ 鹿取 亮介 (理学 017S / 物性理論研究室)

信州大学に入学してから早くも四年の月日が経ち、こうして卒業したことを考えると、とても感慨深い思いです。卒業式を終えた今、学生生活を振り返ってみると、様々な思い出がよみがえってきます。

私は、大学入学前から物理学に対して強い関心を抱いており、好奇心の赴くままに物理学を専攻することにしました。そして、好奇心を原動力に、学習、研究に邁進してきました。大学における学習は、大変なことも多くありました。内容は極めて高度で、抽象的な概念の理解や膨大な量の計算を求められることも多々ありました。その中で、物理や数学に対する理解は一筋縄ではいかず、苦心しながら少しずつ前に進む毎日でした。実験がうまくいかず、夜遅くまで作業をすることもありました。しかし、学ぶことの喜びも多く経験しました。断片的に理解していた内容が結びつき、一つの理論として理解できたときには、とてもうれしい思いがしたものでした。学年が上がるにつれ、内容はより専門性が増していき、自分が特に関心を持った分野の講義を選択することができました。4 年生では超伝導の物性を研究し、一つの分野を深く追求することの面白さを感じました。

4 月からは民間企業で勤務することになりますが、仕事の中で、大学で得た物理学の知識を直接的に生かす機会は少ないだろうと思います。しかし、物理学を学んだという経験は、今後の人生の中で大いに役に立つと考えています。私が物理学から得た教訓の一つに、「物事を多角的に見ることの大切さ」があります。一つの物理現象を見る場合でも、その見方、考え方は複数あります。ある角度からの視点で考えが行き詰った場合でも、視点を変えてみると、よりよい考えが浮かぶことがあります。社会人としての仕事においても、様々な視点から物事を見つめ、問題の解決策を提案できるような人間になりたいと考えています。

最後に、親身なご指導をいただいた先生方、及び、ともに支えあいながら 4

年間を過ごした同期の皆さん、そして両親に深く感謝を申し上げます。多くの方々に助けられ、実り多い学生生活を送ることができ、無事に卒業をすることができました。大学での思い出を胸に、今後も日々精進していきたいと思います。

： 成績優秀者の表彰 ：

卒業式の日、次の成績優秀者が表彰され、当会からは副賞記念品としてガラス製の置物「子ふくろう」（右）が贈られました。

鹿取亮介 小泉健太郎 小池由稀奈 後藤祐輔 Prateepkaew Jakkrit



▲3月21日挙行の卒業式の後、全員集合しての記念撮影。卒業生は、学部：24人、修士：15人、博士：2人

｜W｜E｜B｜登｜録｜者｜拡｜大｜運｜動｜ご協力ください！（再掲載）

信大物理同窓会事務局では、会員同士を結ぶ“絆”としてWEB会員登録をたいへん重視しています。WEB登録いただければ、当会メーリングリストに加入でき、会報や役員会議録、会報の発行情報、メルマガ等が受け取れます。また、個人から登録者全員への情報発信もできます。一旦登録された方は、ほとんど辞めずに継続されています。つまり、世代や学年そして研究室の枠を超えて同窓会員同士が生涯に渡ってお付き合いできるツールとなっています。

しかし、このシステムを知らない会員がたくさんいます。そこで、あなたの友人・知人で未登録の方がいましたらこのメルマガを転送するなどして、個人的に勧めていただくよう、お願い申し上げます。

●登録WEBページ → http://www.supaa.com/supaa_form.html

近年の登録者数の推移は以下の通りです。ここ数年は登録者が増えています。
おかげさまで、登録会員の総数が現在 400 名を超えています。

◎信大物理同窓会 WEB 会員登録者数（新規・変更）の年間推移

2010 年：16 人 2011 年：10 人 2012 年：13 人 2013 年：9 人 2014 年：9 人
2015 年：22 人 2016 年：45 人 2017 年：35 人 2018 年：23 人 2019 年：18 人
2020 年：14 人



＜再掲＞■「同窓会費」は終身会費として 1 万円。『会計細則』決まる！■

1. 同窓会費は終身会費として 1 万円とする。一括払いを原則とするが、本人からの申し出があった場合は事務局長が分割払いを認めることができる。
2. 事務局長名で金融機関に同窓会の口座を設ける。事務局長が通帳・印鑑を管理する。会計担当がカードを管理して口座からの出し入れなどを行う。
3. 在校生からの同窓会費徴収は、事務局が徴収日を決めて実施する。徴収後、在校生の会費支払い者リストは、すみやかに会長ほか、会計担当および関連事務局員に伝達する。
4. 金融機関への振込み手数料は会員の負担とする。
5. 会計担当は、年 1 回開催する総会を利用したり、メールで呼びかけたりして、卒業生からの会費徴収に勤める。
6. 毎年開催の同窓会総会における参加費の徴集など会計管理については、その年の幹事が担当し、事務局が補佐する。必要経費は事務局から事前に仮払いのかたちで支出できる。幹事は開催後しかるべく早く収支を事務局に報告し清算する。
7. 会計年度を 4 月から翌年 3 月とする。会計はすみやかに決算報告を作成して会計監査担当から監査を受ける。
8. 本細則の改正は総会で行う。

▼下記いずれかの口座に「同窓会費」のお振込みをお願いします！



◆郵便局の場合／通常郵便貯金 記号：11150 番号：20343411 口座名義：信大物理同窓会 代表者 武田三男（たけだみつお） 住所：390-8621 松本市旭 3-1-1

◆銀行の場合／八十二銀行 信州大学前支店 店番号：421 普通預金 口座番号：650215 口座名義：信大物理同窓会 代表者 武田三男（たけだみつお） 住所：390-8621 松本市旭 3-1-1

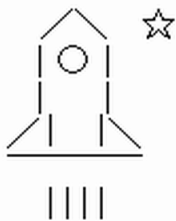
〃〃〃〃〃〃〃〃〃〃 ◎編集後記◎ 〃〃〃〃〃〃〃〃〃〃

◆・・・次回から、書評というか、感想文のようなものを書くコーナーの担当を任された。誰かに、書評というか、感想文のようなものを書くように、依頼しないとイケない。困ったものだ。僕は、それほど、交友関係も広くなく、ましてや、何か書いてくれる人などを見つけるのは、至難の技だと感じている。いや、自分のようなものが、書くような資格はありませんよ、などと、断られる。物理っぽく

いうと、「書く」という状態になるのに、高いポテンシャル障壁があるようだ。小学校の時の連絡帳みたいに、牛の涎のように、気軽に書いてくればいいのに、万人の目に晒されるとか、知りもしないで偉そうにとか、おそらく、自分が、他の人の文章を読んで思うことを、逆の立場で、思ってしまうのだろう。依頼しても受けてくれない人の心理を想像すると、僕などは、他人の文章を読んでも、そんなことを思わないし、ひどい時は、読んでいないこともあって、だからなのか、たくさんのか、書くことを書いてはいるし、こういう自由に書ける場所があるのは、ありがたい、と思っている。間違いも、いっぱい書く。だから、恥もかく。とにかく、誰か、書いてくれる人を探さないといけない。とても気が重い。いざとなれば、自分が書いてしまおうなんて思う。ポテンシャル障壁を下げてしまえば、いくらでも、書ける。この文章を読んでもくださった奇特な方、日々読んだ本の感想とか書いてみたい、というさらに奇特な方、奇特という係数が2乗なのだけれど、編集あてに、ご連絡ください。(AK)

- ★・・・今年で東日本大震災から10年を迎えました。2月の東北沖震源の地震の数日後、信濃毎日新聞の1面コラム『斜面』で、「天災は忘れた頃に…」の他いくつかの寺田寅彦の言葉を取り上げられていました。中でも「文明が進むほど天災による損害の程度も累進する」の警告は、先の言葉と並べて防災の教訓としたいと思います。(YM)

- ☆・・・3.11から10年、記憶や記録が整理され、歴史となっていく時に様々なバイアスが掛かるので、事実にとどり着くのは大変なことです。人それぞれに事実があり、だから研究する意味もあるのでしょう。忘れてはいけないことがたくさんあります。「物理学史は歴史学だ」と勝木渥先生はおっしゃっていましたが、その勝木先生を偲ぶ会から3年が経ちました。会を契機に改めてまとめられた、勝木先生が残された『記録』を使って、新しい研究が生まれるなら、とても嬉しいことです。その紹介を書かせて頂きました。同窓会の輪も、このように広がっていくことを期待しています。(NA)



- ・・・コロナ禍のなかでの集団活動の閉塞感が絶えません。他国頼みのワクチンには期待が大きいものの自国での開発遅れが極めて残念な中、去年は中止とした第23回総会ですが、今年の第24回総会は松本にて6月26日(土)に開催する予定として総会幹事が構成されて多くの会員との再会の場を設ける準備を始めています。新型コロナそして変異種の感染は大きな懸念ですが、状況次第にて5月連休明けには開催可否を決する予定です。総会開催がどうあろうと、私達の物理同窓会では、この通信を手段として緊密な情報交換の場を確保できていることに感謝すると共に自負できることと思います。ご投稿いただいた方々には、心から感謝申し上げます。(HT)

- ・・・菅首相の子息もからみ総務省の接待疑惑が週刊文春に報じられ、国会での追及によってその醜悪な実態が明るみに出た。総務省には強い権限があり放送業界全体はコントロール下にある。かつてテレビ局に対し「電波を停める」とまで発言し物議をかましたのは高市元総務大臣。安倍前首相、菅首相のNHKへの人事介入は有名である。かくして政府与党寄りの報道が横行。我が国における報道の自由度は大きく後退した。それが安倍長期政権を支えたともいえる。(国民に本当のことが知らされているのか? そんな中、週刊文春など出版社系のメディアが権力に臆せず気を吐いている)世界的にも珍奇な、新聞社が放送局を系列に持つという我国の仕組みとも相まって、報道が行政を監視するという役割が希薄になった。結果として行政がゆがみ(?)、産業界を眺めても、GAF Aに遅れをとる情報通信業界、ジェット機の自前生産を断念した航空機産業、世界的にみて高額料金の電力業界、新型コロナワクチンを国産できない薬剤業界…などなど、国力の衰退は明らかだろう。日本学術会議の問題も、政治が学問の世界も押さえ込もうという同じ文脈で読むことができる。(MT)

=====

● 信州大学物理同窓会会報 0076 号 (2021 年春号) SUPAA BULLETIN No. 76 ●

● 2021 年 3 月 27 日発行 ●

□ 編集・発行／信大物理同窓会事務局

□ 編集長：高藤 惇 □ 発行人：太平 博久

《編集委員》高藤 惇(2S) 渡辺 規夫(4S) 太平 博久(6S) 足助 尚志 (17S) 百瀬 佳典 (17S)
来田 歩 (22S) 武原 一記 (22S)

■当会報のバックナンバー閲覧サイト：<http://www.supaa.com/kaiho/index.html>

■当会へのお問い合わせ先：<http://www.supaa.com/postmail/postmail.html>

(C)信州大学物理同窓会事務局 無断複製・転載を禁ず
